

42243

教科書文庫

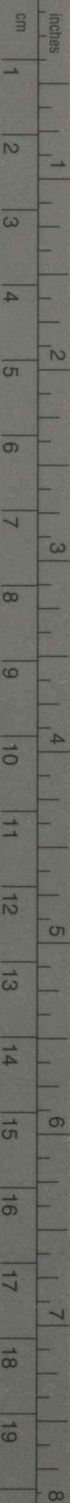
4
810
42-1928
200030
1549

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Y019
資料室

新定女子國文

卷二



375.9
Y019



昭和三年二月二日
文部省檢定濟

吉田彌平編

新定女子國文 卷二

金港堂書籍株式會社



新定女子國文 卷二

目次

一 私の母……………	夏目漱石……………一
二 母と蘆……………	西條八十……………七
三 豆の上に寝た王女……………	楠山正雄……………三
四 花火……………	生田春月……………六
五 波の音……………	相馬御風……………四
六 夕暮……………	柳澤健……………二
七 鞍馬の火祭……………	志賀直哉……………元

目次

八	札幌農園	菊池幽芳	二〇
九	時計のない村	小川未明	二四
〇	村の秋	徳富健次郎	二五
一	専心	北原白秋	二六
二	永代橋		二七
三	ローレライ	黑板勝美	二八
四	車下		二九
五	頓智救命		三〇
六	色紙の勳章	下村海南	三一
七	幼時の美観	正岡子規	三二
八	落葉	島崎藤村	三三
九	大阪城	澁川玄耳	三四

〇	泉岳寺	大町桂月	三〇
一	三浦路	川上眉山	三五
二	豪商と碩儒		三九
三	北地の冬	五十嵐力	三五
四	梅の花と露の臺	薄田泣菫	三六
五	春の雲	三木露風	三七
六	雛祭の記	高濱虚子	三九
七	貨幣礫	三浦修吾	四〇
八	笛	坪内逍遙	四一



新定女子國文 卷二

夏目漱石

名は金之助

文學者

大正五年歿す

一 私の母

夏目漱石

私は母の記念の爲に何か書いて置きたいと思ふが、^{ウズルク}生憎私の知つてゐる母は私の頭に大した材料を遺していつてくれなかつた。

母の名は千枝といつた。私は今でも此の千枝といふ言葉を懐かしいものゝ一つに數へてゐる。だから私にはそれがたゞ私の母だけの名前で、決して外の女の名前であつて

はならないやうな氣がする。幸ひに私はまだ母以外の干枝といふ女に出會つた事がない。母は私の十三四の時に死んだのだけれども、私の今遠くから呼び起す母の幻像は、記憶の絲をいくら辿つていつても、お婆さんに見える。晩年に生れた私には、母の瑞々しい姿を覚えてゐる特權が遂に與へられずにしまつたのである。私の知つてゐる母は、常に大きな眼鏡を掛けて裁縫をしてゐた。其の眼鏡は鐵縁の古風なもので、球の大きさが直徑二寸以上もあつたやうに思はれる。母はそれを掛けたまま、すこし顚を襟元へ引きつけながら、私をじつと見る事が屢あつたが、老眼の性質を知らない其の頃の私には、それが

たゞ母の癖とのみ考へられた。夏になると、母は始終紺無地の紹の帷子を着て、幅の狭い黒繻子の帯を締めてゐた。不思議な事に、私の記憶に残つてゐる母の姿は、何時でも此の眞夏の服装で頭の中に現れるだけなので、それから紺無地の紹の着物と幅の狭い黒繻子の帯を取除くと、後に残るものはたゞ彼女の顔ばかりになる。母が嘗て縁端へ出て兄と碁を打つてゐた様子などは、彼等二人を組合せた圖柄として、私の胸に收めてある唯一の記念なのだが、其處でも彼女はやはり同じ帷子を着て、同じ帯を締めて坐つてゐるのである。母が父の處へ嫁に来るまで御殿奉公をしてゐたといふ話

も臙氣かすかに覺えてゐるが、何處の大名の屋敷へ上つてどの位長く勤めてゐたものか、御殿奉公の性質さへ能く辨へない今の私には、たゞ淡い薰かほを残して消えた香のやうなもので、殆ど取留めやうのない事實である。

しかしさう云へば、私は錦繪に描いた御殿女中の羽織つてゐるやうな派手な總模様の着物を、宅の藏の中で見た事がある。紅絹裏を附けた其の着物の表には、櫻だか梅だか、一面に染め出されて、處々に金糸や銀糸の刺繡も交つてゐた。是は恐らく當時の襦うすひら襦うすひらとかいふものだらう。しかし母がそれを打掛けた姿は、今想像してもまるで眼に浮ばない、私の知つてゐる母は、常に大きな老眼鏡を掛けたお婆さ

んであつたから。

母は生涯父から着物を拵へて貰つた事がないといふ話だが、果して拵へて貰はないでも濟む位な支度をして來たものだらうか。私の心に映るあの紺無地の紹の帷子も、幅の狭い黒縹子の帶も、やはり嫁に來た時から既に簞笥の中にあつたものなのだらうか。私は再び母に會つて、萬事を悉く口づくちづからきいて見たい。

悪戯で強情な私は、決して世間の末子のやうに母から甘く取扱はれなかつた。それでも宅中で一番私をかはいがつてくれたものは母だといふ強い親みの心が、母に對する私の記憶の中には、何時でも籠つてゐる。愛憎あいそうを別にして考

へて見ても、母はたしかに品位のあるゆかしい婦人に違ひなかつた。さうして父よりは賢さうに誰の目にも見えた。氣むづかしい兄も母だけには畏敬うやまつの念を抱いてゐた。

「御母さんは何にも言はないけれども、何處かに怖いところがある。」

私は母を評した兄の此の言葉を、暗い遠くの方から明かに引張り出して、それが今でも出来る。其の外の事になると、私の母はすべて私に取つて夢である。とぎれくゝに残つてゐる母の面影をいくら丹念たんねんに拾ひ集めても、母の全體はととも髣髴ふふせつする譯に行かない。其のとぎれくゝに残つてゐる昔さへ、半ば以上はもう薄れ過ぎて、しつかりとは

つかめない。(箱子戸の中)

西條八十

文學者
詩人

二 母と蘆

西條八十

ふるさとの母をおもへば、
片岡の蘆もなつかし。
さやくと風のわたれば、
靡きよる夕の穗波、
わが母の眉をしのばせ、
しめやかに雨ふる夜半は、
そことなき葉ずれのひびき、

わが母の聲音しんにまがふ。

ふるさとの母をおもへば、

片岡の蘆もなつかし。

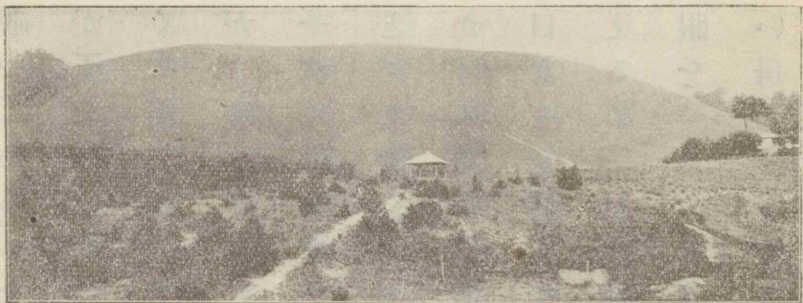
少年時代、私は東京を離れて、一年ばかり奈良の古都に近い田舎で暮したことがある。生れて始めて両親の傍を離れたので、私は明けても暮れても、東京の空を眺めては、あの明るい銀座の街の灯をこひしがつた。

私が居た家の裏手は小高い丘になつて、そこには青い蘆が一面に生え茂つてゐた。私の室の窓の障子を明けると、眼の前にそれが見えた。晝間は丘の上にコバルト色の空が

Cobalt
コバルト

覗いてゐる。大それたかんじをりくく、白い雲が流れた。蘆の中では葦切あしきりが玉を切るやうな聲を立てた。夕暮には、何處からともなく次第に黝く煙のやうにせまる暮色のうちを、冷たい夕風がさやく、わたつて来て、蘆の細い葉をゆるがした。私が一ばん好きなのは、この夕風にそよぐ蘆の葉を見てゐることであつた。あちらに黒く、こちらに白く、風に靡いて光りかげる蘆の穂波を見てゐると、それがいろくくに人の眉、鼻口などを描くやうであつた。殊にそれが優しい顔付に見えるので、私は懐かしい母の顔を思ひだした。私はじつと眼をつぶつて其の蘆の生えた丘の面いつぱいの巨きな白い母の顔を想ひ浮べた。さうして、うすら冷たい風のなか

嫩草山
奈良市の東方春
日山の北にある
丘陵



で、ひとり「お母さん」となつかしく、涙ぐましく叫ぶのであつた。
又、その時分、私は毎晩一里の路を歩いて、奈良の町まで英語を習ひに行つた。嫩草山の麓にギンポールといふアメリカ人のお婆さんが住んでゐた。もう七十に近い年で、年中眞黒い服を着て、赤くたんだれた兎のやうな眼に大きな眼鏡をかけてゐた。その人に夕方の六時から七時まで英語の讀方と發音とを教はり、それから濫いおいしい紅茶を御馳走され

て歸つて來る時分には、もう田圃のなかの夜路にはとつぷり日が暮れてゐて、蛙の聲だけが諸方に寂しく聞えるのであつた。かうして獨り丘の徑を下つてくるときに、兩がはの蘆の葉のさら／＼と戦ぐ音は、恰も彼等が内證で何か囁き合つてゐるやうであつた。時としては、多數の人が其の葉蔭に集つて何かひそ／＼話してゐるのではないかと思はれることがあつた。さうして其の聲の中に、殊更聞き覚えのある母の聲が聴きとれるやうに思へた。
しめやかに小雨の降つてゐる夜などには、とりわけさうした感じが深かつた。室へ戻つて戸を締めて床に就いてからも、やさしく諄々と諭すやうな母の聲音が、いつまでも、し

みじみと耳もとに響いてゐるのであつた。
その頃の母戀ひしさの心を、私は「母と蘆」といふ名でこゝに
歌つたのである。(海邊の墓)

豆の上に寝た王女

本課はデンマル
クの小説家殊に
お伽噺作家とし
て有名なアンデ
ルセンの童話を
が譯したもの

Hans Christian
Andersen
(1805-1875)
楠山正雄
文學者



ンセルデンア

三 豆の上に寝た王女 楠山正雄

むかし或國に王子があつて、どこかの王女をお嫁に貰ひた
いが、何でもそれは本當の王女でな
ければならないと思ひました。そ
こで王子はどうかしてさういふお
嫁を探さうと思つて、世界中まはつ
て歩きました。が、何處へ行つても思ふやうな人が見つかり

ませんでした。それは王女の數はありあまるほどありま
したけれど、さて是非本當の王女をといふことになる、も
うまるでだめなものが多かつたのです。どうも何かしら
そこに、これではいけないと思ふところがあるのです。そ
こでしかたなしにまた國へ歸つて來ましたが、これほどに
して本當の王女を求めることが出來なかつたのですから、
つくづくつまらなく思つてゐました。

或晩怖しい嵐がありました。稲光がして、雷が鳴つて、雨が
瀧のやうに降りました。全く怖しい晩でした。するとそ
のさ中に、町の門をどん／＼叩く音がしました。年を取つ
た王様はそれをあけに出て行きました。門の外に立つて

ゐたのは一人の娘でした。けれどもまあ雨に打たれ、嵐にさいなまれて、何といふ様子をしてゐたでせう。髪からも着物からも雫がぼたく／＼垂れてゐました。雫は靴の先にもしみこんでゐましたし、踵から外にも流れ出してゐました。それで此の娘は、わたくしこそ本當の王女ですと名乗りました。

「よし／＼ぢきに分ることだ」と、年を取つた王様は心の中でさう思つたなり、口に出しては何も言はないで、そのまま、寢部屋へはひりますと、その敷物をのこらずどけて、寢臺の一ばん下に豌豆を入れました。それから蓆むしろを二十枚持つて来て豆の上に載せ、その上に雁の毛蒲團を二十枚敷きましました。

そこで一晚娘は眠る筈でした。

その翌くる朝、娘は、昨夜はよく寐られましたかとたづねられました。

「まあ、ひどい目に遇ひましたは」と、娘は答へました、「私は一晩中碌々寐つきませんでした。一體あの寢臺はどうしたといふのでせう。私は何ですかごつく／＼堅いものゝ上に寢て居りますやうで、體中ぶちになつたやうな氣がいたします。全くいやな心持でございました。」

そこで此の娘は本當の王女だといふことが分りました。なぜなら蓆を二十枚敷いた上に雁の毛蒲團を二十枚重ね

ても、王女はその下に豌豆のあることがわかつたのです。本當の王女でなくては、そんな柔かな肌をしてゐる筈がありません。

そこで王子はこの娘をお嫁にしました。本當の王女を探し當てたことがわかつたからです。そして豆は博物館に納まりました。それは今でも、盗んで持つて行きさへしなければ、誰にでも見せてくれる筈です。

どうです。これは本當のお話ですよ。(アンデルゼン童話全集)

四 花 火

生 田 春 月

郷里の白河に歸つてゐた私の若い友達が、最近出て来て、震

生田春月
名は清平
詩人
白河
福島縣白河郡白
河町
東北本線で奥州
への入口

震災
大正十二年九月
一日の關東大地
震

災當時、其の町にあつた面白い話を聞かせてくれた。今度の震災で、いろ／＼な悲惨な話や、涙のこぼれる様な話や、珍しい話も澤山あらうが、こんな面白い愉快な話は、一寸外に聞いた事がない。氣の利いた小説を書く才能をもつた人ならば、此の話から、すばらしい傑作を書くことが出来るであらう。私にはそんなことは出来ないから、唯聞いたまゝを簡単に書いて見よう。

あの時には白河の町にも、澤山の人が汽車から降された。其の中に大阪の方から来て、秋田へ行くのだといふ一人の男があつた。警官や町の人たちが多勢立會の上、其の男の携帶品を取調べたところが、驚いた事には、彼は十個の爆彈

を携帯してゐたのである。そこで、自警團の連中は憤激した。「此奴はあやしい奴に違ひない、擲つてしまへ、擲つてしまへ。」と氣の早い連中はどなり立てた。すると此の男は、すつかり狼狽してしまつて、へどもどししながら、斯ういふ辯解をした。自分は決して怪しい者ではない、あなた方が爆彈だと仰しやるのは、是は實は花火であつて、秋田の共進會に出品しようと思つて持つて來たのだと、かう言ひ張つて聽かなかつた。

果して彼の言ふやうに、それが花火であるか、それとも爆彈であるか、白河の人たちには、到底判断する事が出来なかつた。一度花火の装置を見た事のある男の説では、成程恰好

は花火には似てゐるが、花火にしては第一あんまり大き過ぎるといふ。近頃の爆彈は随分色々な形状と装置とを持つてゐるから、是は爆彈に違ひないと云ふので、殺氣立つた町の人は、あはや大阪の男を取りこめて、手にく棒や武器を振廻さうとしたのを、警官が一生懸命に制してゐると、其の男はがたく、顛へながら、たうとう堪らなくなつたと見えて、そんなら一つこれを揚げて見まつせ。」と大阪辯で言ひ出した。「揚げて見さへすりや、爆彈だか花火だかぢきに分りますは。花火も花火、秋田の共進會で一等を取りたいと思つて、私が一生一代の腕によりをかけてこしらへたものやで、そりやすばらしいものだつせ。」さうか、そんなら一つ

揚げて見ろ。そんなに自慢をする位なら、まんざら嘘でもうそを本気でやろうとはあるまい」といふので、愈、それを揚げて見ることになつて、それまでは、彼は警察で保護して貰ふことになつた。併し、萬一爆彈であつたら大變だといふので、警察から町中に、今夜何時に、何處其處で彼の怪しい人物の携帶品を、爆彈か花火か實際に火をつけて見るから、其の爆音に驚かないやうにとふれをした。すると其の夜、好奇と不安の心に驅られた町中の人々は、指定の廣場しきれたところに集つて來た。愈、一定の時刻が來ると、彼の男は嚴重な警戒と監視のもとに、廣場の眞中に立ち現れた。

「爆彈だなんて事を仰しやりますが、まあ御覽じろ、そりや、どえらい見事なものだつせ」と彼は、自慢しながら、用意を始めた。どうにかして命を助りたい一念と、自分の努力の効果を見る期待とに彼は興奮して、せつせと支度を始めた。併し、花火を打上げる適當の筒が其の町に無かつたので、急ごしらへにこしらへた筒に入れて、先づ最初の一發に點火した。

花火か爆彈かと、半ば恐怖に驅られて、廣場を遠卷にして見物してゐる町の人たちの目の前に、昇り龍、降り龍などといったやうな、平凡なものではなかつたであらうが、とにかく彼の言つたやうな、すばらしい空中の蜃氣樓が、燦爛たる火光を放つたのである。

「ほんとに花火だ、私どもはこんな立派な花火をまだ見た事がない。」と、町の人たちはめい／＼有らん限の感嘆の聲を放った。

「成程花火だ、見事な出来だ。お前はなか／＼いゝ腕を持つてゐるな。」と、警官も大いに彼を賞揚した。

「もつと揚げろ揚げろ。」と群集は叫んだ。

「揚げまつさ、みんな揚げてしまひまつさ。此の次のは、もつと上等だつせ。」と彼は言つて、また更に一發に點火した。かうして彼が秋田の共進會で、一等を取らうと意氣ごんでゐた十發の花火は、たうとう一つ残らず試されて、白河の空の上に、彼の優れた技倆を十分に發揮して消えてしまつた。



花火

私の書き方は一向つまらなかつたが、此の花火の話其の物は、實に面白いではないか。文藝家の才筆を煩はしたら、どんなすばらしい小説になつたか知れない。此の大阪の花火屋の技倆は冴えてゐたに違ひない、恐らく超凡のものであつたと謂ひ得るだらう、何しろ一同が我を忘れて見て居たことであるから。そして命を助つた彼も幸福であつたが、こんなすばらしい花火を見る事を得た白河の人たちも、幸福であつた。

「私はその見せませんでした、私の叔母はそれを見て、これまでこんな花火を見た事はないが、これから見る事はあるまい、本當に一生のいゝ思ひ出になつた。」と、ここに

こして喜んでゐました」と、私に其の話を聞かせてくれた若い友達が言つて笑つた。私も笑つた。そして、花火がすばらしい藝術であることを、今始めて知つたのである。そして、此のすばらしい藝術をつくるものが、單に其の作者一個ではなくして、實にその場合の自然も與つて力ある事を知つたのである。そして、私の此の結論が小説の形式になふか否かは、私の敢へて問はないところである。(智慧に輝く愛

五 波の音

相馬御風

私の書齋の南の窓からは、様々の形をした高い山の幾つも

相馬御風
名は昌治
文學者
私の書齋
作者は新潟縣糸魚川町に住む

立ち並んでゐるのが見えるが、北の窓からは、裏の家の屋根越しに、茫々とした日本海が見渡される。波ぎはまでの距離が一町とないので秋の末から冬へかけては、殆ど毎日さまざまの波の音が家をゆすぶるのであるけれども、さうした波の響も、住み慣れるに従つて、段々驚かなくなつて行く。曾て私が田山花袋氏に書いて貰つた短冊のうちに、

なみく、に心はやすし、荒波の

さわぐ磯邊にけふはねたれど。

といふ一首が有つた。ひどく其の歌が心になつたので、書齋の柱の短冊掛けにずっとその短冊をかけ續けてゐる。波の音が苦になつて眠れないやうな夜も、ずっと以前には

田山花袋
名は録彌
小説家
紀行文家

有つたが、此の頃は全くそんな事がなくなつた。それどころでなく、この頃は寧ろ其の波の音に、一種の深い親みをさへ覺えるやうになつた。たまに、波の音の全く聞えない土地へ行つて宿つた夜など、妙に物足らないやうに感ずるところとさへある。漁師たちは、夜靜かに波の音を聞いてゐると、翌日の天氣が解るとまで言つてゐる。

時として、海がまるで油を流したやうに、平に凧ぐことがある。そんな時の方が却て凄みがある。おまけにさうした場合、見渡すかぎり一隻の小船すらも認められなかつたりすると、その凄みは一層深みが加はつてくる。海が最も快

活な相を現すのは、そよ風に漣波の織出される時である。油を流したやうに平に凧渡つた海、魔女が持つといふ鏡かなどのやうに、平に澄渡つた池又は暴風の來ようとする前などに、じつと息を凝したやうに靜まり切つてゐる森——それらの靜寂な姿には、何れも神秘的な凄みが伴ふ。しかも時あつて、さうした神秘的な靜寂の世界へ、一羽の水鳥、一片の落葉でも突如として一脈の動を點ずる刹那の感じ——それにも測り知れない深さがある。

自分の動く音以外に、何の音もない夜の靜寂の底に浸つてゐる時、一羽の蛾が燈火のあたりに動く、その刹那に感ずる生の波動——それにも測り知れない深さがある。

山に對し、波を聽きつゝ送る私たちの朝夕は單調である。しかも、私はその單調裡にあつて、今では寧ろ「今一層單調に」と希ふ程に慣れてしまつた。(對山雜記)

柳澤健

六 夕 暮

柳 澤 健

詩人
新聞記者
外務省書記官

お宮の屋根には親の鳩、
落葉の上には子の小鳩、
ほろ／＼ほろり、ほろほろり、
啼いてるうちに日が暮れた。

峠三里の上り下り、
やつこらやつと來は來たが、
めざした街の燈火が、
見えないうちに日が暮れた。

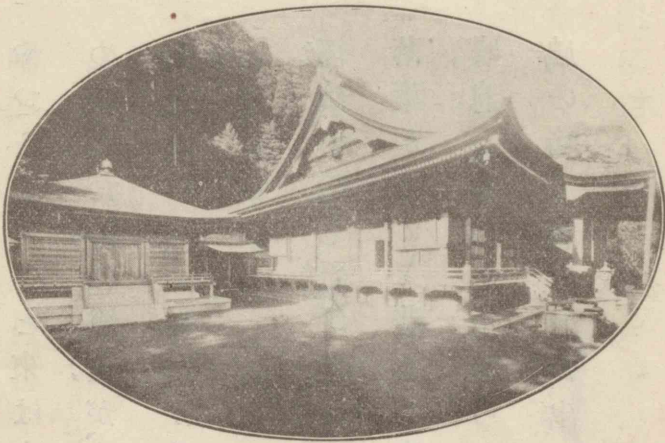
徑は小暗し、燈は持たず、
落葉かさ／＼悲しく寒く
嘆息つけばほろほろり、
鳩の啼く音に月が出た。(鑑賞自由詩選)

志賀直哉
文學者

七 鞍馬の火祭 志賀直哉

鞍馬
京都府愛宕郡鞍
馬村
山中に鞍馬寺と
いふ天台宗の寺
がある

十月二十日過、私は二三人の友達と鞍馬へ火祭といふのを



見にいづた。日暮に京都を出て、
北へくと幾らか登りの道を三
里ほど行くと、遠く山の峽がほん
のり明るく、その邊一帶淡く煙の
馬立ちこめてゐるのが眺められた。
寺 苔の香を嗅ぎながら、冷えくと
した山氣を浴びて行くと、この奥
にさういふ夜の祭があることが
不思議に感ぜられた。子供づれ
友づれの見物人が提燈をさげて行く。それを時々自動車

が前の森や山の根に強い光を射つけながら追ひぬいて行
く。山の方からは五位鷲が啼きながら飛んで来る。そし
て行くほどに、幽かなくすぶり臭い匂がして来た。
町では家ごと軒先に、といつても通が狭いので、道の真中を、
一列に焚火が並んでゐた。大きな木の根や人の脊丈ほど
ある木切れて三方から圍ひ、その中に燃えてゐるのが、何か
岩間の火を見るやうな一種の感じを起させた。
焚火の町を出ぬけると、稍、廣い場所に出た。幅の廣い石段
があつて、その上に丹塗にれの大きな門があつた。廣場の兩側
は一杯の見物人で、その中を下帯一つに肩だけちよつとし
たものを着て、手甲、脚絆、草鞋がけに身を固めた向ふ鉢巻の

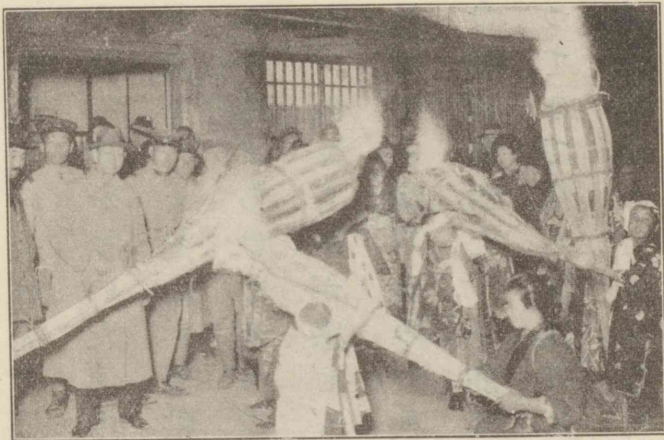
最澄
高僧
天台宗延暦寺の
開祖
勅諭傳教大師
弘仁十三年二月
三寂す

若者たちが、柴を束ねた藤蔓で巻いた大きな松明を擔いで、「最澄祭禮」——これは本當ではないが、ちよつとさう聽きなされる掛聲をしながら、兩足を踏張り、右へ左へよろけつゝ、上手に中心を取つて歩いてゐる。或者はよろける風をして、わざと群集の前へ火を突きつけたり、或者は家の軒下にそれを擔ぎこんだりした。火の燃え方が弱くなり、自分の肩も苦しくなると、一抱ほどあるその松明を不意に肩から外し、どさりと勢よく地面へ投げおろす。同時に藤蔓がはじけて柴は開き、火は非常な勢で燃え上る。若者は汗を拭き息を入れてゐるが、今度は又別の肩にそれを擔ぐ。それも一人ではとても上げられず、傍の人から助けて貰ふので

ある。

この廣場を抜け、先の通へ入ると、そこにはもう焚火はなく、今の松明を擔いだ連中が「最澄祭禮」と聞える掛聲をして、狭い所を行き交ふ。子供は年相當な小さい松明を、わざと重さうによろけながら擔ぎ廻る。町全體が淡く煙り、氣持のいゝぬくもりが感ぜられる。

星の多い澄み渡つた秋空の下で、かういふ火祭を見る心持は特別だつた。一筋の低い軒並の裏は、すぐ深い溪流になつてゐて、そして他方はまた高い山になつてゐるといふやうな處では、いくら賑はつてゐるといつても、その賑やかさの中には、山の夜の静けさがしみ透つてゐた。これが都會



のあの騒がしい祭より外知らぬ者には大變よかつた。そして人々も一體に眞面目だつた。「最澄祭禮」この掛聲の外には大聲を出す者もなく、酒に酔ひしれた者も見かけられなかつた。しかもそれはすべて男だけの祭であつた。清いつめたさうな水が乳のあたりを波打ちながら流

鞍 馬 火 祭

或家で裸體の男が軒下の小さな急流に坐つて眼を閉ぢ手を合せ、長いこと何か口の中で唱へてゐる。

れてゐた。大きな定紋のついた、變に暗い提燈を持つた女の兒と、無地の麻帷子を展げて持つた女が軒下に立つて、その男のあがるのを待つてゐた。漸く唱言を終へると、男は立つて、流の端に揃へてあつた下駄を穿いた。帷子を持つた女が濡れた體に黙つてそれを着せかけた。男は提燈を持たず、下駄を曳きずつて、すぐ暗い土間の中へはひつて行つた。これはこれから神輿を擔ぎに出る男だといふ。かういふ連中が間もなく廣場の石段下に大勢集つた。そこには二本の太い竹に高く注連繩が張り渡してあつて、その注連繩を松明の火で焼き切つてからでなければ、誰もその石段を登ることが出来ないとのことだ。しかし繩は三

間よりもつと高い處にあつて、松明を立て、も、その火はなかなかそこまでは届きさうにない。澤山の松明がその下に集められる。その邊一帶、火事の時のやうに明るく、一緒に早くそのの焼き切られるのを仰向いて望んでゐる群集の顔を赤く照し出してゐた。

やがて漸く火が移り、繩が火の粉を散らしながら二つに分れ落ちると、眞先に拔刀を振り翳した男が、非常な勢で石段を駈け登つて行つた。群集は叫び聲をあげながらすぐそれに續いた。しかし山の門にもう一つ、それは低く、ちやうど人の丈よりちよつと高いくらゐに第二の注連繩が張つてある。先に立つた拔刀の男はそれを振り翳したまゝ駈

お旅
神輿のお旅

け抜ける。注連繩は自然に切れる。そして群集は坂路を奥の院までそのまゝ駈け登るのである。

「どうだい、もう歸らうか」と私は友を顧みて言つた。

「お旅でやるお神樂を見て行かうよ。」

神樂といふのは、四五人で擔ぐくらの大きな松明をいくつか、神樂の囃子に合はせて、神輿のまはりを擔ぎ廻るのである。

「大概もうわかつたぢやないか。」

「何時だ。二時半か。」

時計を見ながら友達がいつた。

「これで京都へ歸ると、ちやうど夜が明けられるかも知れませ

「んよ。」と、もう一人の友達がいった。

焚火の町では、来る時岩間の火のやうに見えてゐたのが、今は盛に燃えてゐた。町を出ると、急に山らしい冷気が感ぜられた。私たちは時々振返つて、明るい山の峽を見た。道は往きより近く思はれ、下りて樂でもあつたが、やはり皆は段々疲れて、無口になつた。

「睡くてかなはん。」

と一人が言つた。

「僕が腕を組んで行つて上げるから、眠りながら行き給へ。」もう一人がさういつて、二人腕を組んで歩いた。

叡山
比叡山
京都の東北
山城と近江の境
にある名山

菊池幽芳
名は清
新聞記者
小説家

農科大學
今の北海道帝國
大學農學部

京都へ入る頃は、實際友達がいったやうに、叡山の後ろからしら／＼と明けて來た。(暗夜行路)

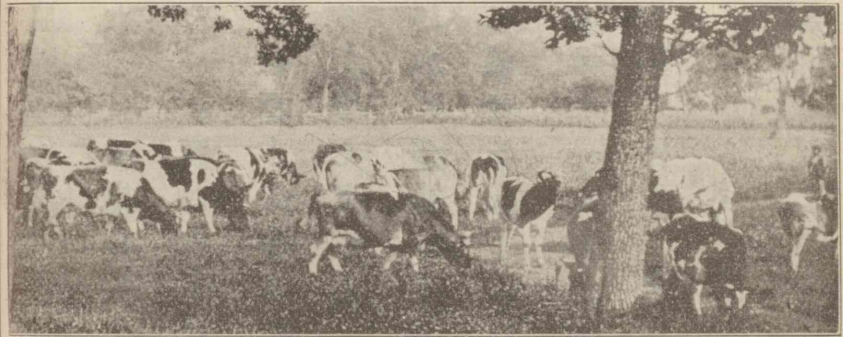
八 札幌農園

菊池 幽芳

札幌に於て最も詩趣に富める地を求むれば、蓋し札幌農園か。札幌農園は農科大學に附屬せるものにして、實に我が邦の模範農園たり。農園としての設備完全なるに近きのみならず、地は即ち石狩平野の一部なるが故に、到底内地に於て求むべくもあらぬ廣大なる地域を領し、凡百の施設整頓して、些の遺憾を感ずるなく、經營の手腕は縦横に發揮せられて餘蘊なきに近し。然れども余はこゝに農園の設備

を説かんとするものにあらず。余の記さんとする所は唯その風致にあり、農園の粹たる廣き牧場の風致にあり。西北の二面全く開け、平野遠く連なりて、西は遙かに札幌の障屏をなせる連山の紫翠に接し、北は石狩原野を指してその際涯を知らず。萋々たる牧草、氈の如き處、こゝには彼の中林の雑樹の互に相凌ぎ相排するが如きことなく、廣き空間を占めて處まばらに立てる榆ありて、晝は残る隈なく日の光を浴び、夜は思ふがまゝに星の雫を受く。何に遮らるるものもなきその根は、太古のまゝなる土壤より潤澤なる養分を吸取りて、鬱蒼たるその枝葉は以て百歩の地を蔽ひ、亭々たるその幹は以て百尺の空を摩す。一たび足をこの

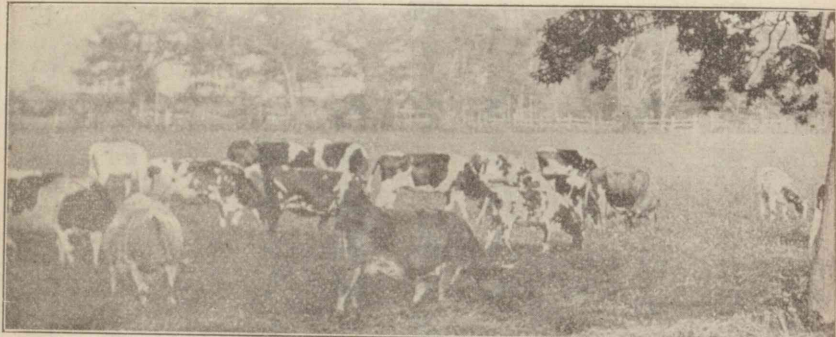
農園の牧場に入るゝもの、一人として遺憾なく發揮せられたる此の榆の美に驚歎せざるはあらざるなり。それ廣漠たる平野の緑は既に人の心を壯快ならしむ。これに喬木の亭々たるを配する時、誰か一段の風致を添へ來るを覺えざらん。唯その喬木の種類によつては、またその風致に多少の増減なき能はず。思ふにかゝる平野を飾るに適せる樹木は松にあらず、杉にあらず、實にその高さと共にまたその幅を有するもの、分明に言へばその枝葉十重二十重に密生し、鬱然として晝猶暗き樹陰を作る喬木ならざるべからず。請ふ、かくの如き喬木の森々として青緑の平野に立てる様を想像せよ。何ぞその畫の如くにして又詩



札幌農園

の如くなるや。人若し十分にかゝる
想像を回らすことを得たりとせば、其
の人は即ち遺憾なく札幌農園を其の
脳裡に描き得たるなり。
農園が楡によつてその風趣を加ふる
こと斯の如し。然れどもこれなほ靜
態に於ける風趣のみ。更に此の間に
牛を點じ、馬を點じ、羊を點ずるに至つ
て、農園の眞風趣は始めて動態となり
て活躍す。
丈高く、四肢長く、體軀驚くべきほど巨

Merino メリノ
Ayrshire エイアシャー
Shorthorn ショートホルン
短角牛
Holstein ホルスタイン



農園

大にして、黑白の斑を有せるホルスタ
イン種の牛が、その大樹の下に、一は横
たはり、一は立てる、或は長方形の體軀
をなせる赤色の短角牛、眼柔しく四肢
短きエイアシャー種の牛等が、此處に
彼處に草を食へる、或はさまよへる、或
は尾をふれる、更にうるはしき毛を被
れるメリノ種の羊が、その角の大にし
て曲れるには似ず、いと優しき眼光も
て馴々しく近づき來るを見ずや。
若し此の世に樂園といふものありと

文章の士
新渡戸稻造
内村鑑三
志賀重昂
有島武郎
その他

小川未明
名は健作
小説家

せば、その關門は實に斯の如き處なるべし。その繪畫的な、その詩的な、又附近の建物と相待つてその米國的なる、少なくともこゝに來るものは、内地の光景と甚だしく相隔れるを感ずるならん。札幌農園は實に斯の如き特色を有す。余は斯の如き農園を自然の師として學べる學生の幸福を賀し、又此の學校より往々文章の士を出せることの、決して偶然にあらざるを知れり。(日本海周遊記)

九 時計のない村 小川未明

町から、遠く離れた田舎のことでもあります。その村には、あまり富んだものがありませんでした。村中で、時計が、たつ

た二つぎりしかなかつたのです。

長い間、この村の人々は、時計がなくて濟んで來ました。太陽の上り工合を見て、およその時刻をはかりました。けれど、この文明の世の中に、時計を用ひなくては話にならぬといふので、村の中での金持の一人が、町に出た時に、その町の時計屋から、一つの時計を求めたのであります。

その金持は、澤山の金を拂つて時計を求め、ことを心の中で誇りました。今日から、村の人たちは、萬事の集りや、約束の時間を、この時計に依つてしなければならぬと思つたからであります。

「この時計は、狂ふやうなことはないだらうな」と、金持は、時

計屋の番頭にたづねました。

「決して、狂ふやうなことはありません。そんなお品ではございません。」と番頭は答へました。

「それなら、安心だが」と、金持はほゝゑみしました。

「この店の時計の時間は、間違ひがないだらうな」と金持はまたきゝました。

「決して間違つてはゐません。標準時に合せてございませぬ。」と、番頭は答へました。

「それなら安心だ」と、金持は思つたのであります。

そこで買った時計を大事にして、自分の村へ持つて歸りました。

これまで時計といふものを見慣れなかつた村の人々は、毎日のやうにその金持の家へ押しかけて來ました。そしてひとりで動く針を見て不思議に思ひました。また、金持から時間の見方を教はつて、彼等は、畠に行つても、山に行つても、寄るとさはると時計の話をしたのであります。

この村に、もう一人金持がありました。その男は、村の人が一方の金持の家ばかり出入するのを嫉ましく思ひました。時計があるばかりにみんながその家へ行くのが癪に障つたのであります。

「どれ、私も、一つ時計を買つて來よう。さうすれば、きつと私の處へも皆がやつて來るにちがひない。」と、その男は思

つたのです。男は町へ出ました。そして、もう一人の金持が時計を買つた店と、ちがつた店へ行きました。その店も、町での大きな時計屋であつたのです。男はいろいろな形の時計をこの店で見ました。なるたけ珍しいと思つたのを選びました。「この時計は、狂はないだらうか」と男は店の番頭に問ひました。「そんなことは決してございません。保険附でございます」と番頭は答へました。「この時計の時間は、合つてゐるだらうか」と男はたづねました。

「標準時に合つてゐます」と番頭は答へました。「ねちさへかけて置けば、いつまでたつても間違ひはないだらうか」と男は念のために問ひました。「この時計は、幾年たつても狂ふやうなことはございません」と番頭は答へました。男は、これを持つて歸れば村の人たちがみんな見に来るにちがひないと思つて、その時計を買つて大事にして村へ歸りました。もう一人の金持が別の時計を町から買つて來たといふ噂が村にたつと、果してみんながやつて來ました。

「時計をどうぞ見せて下さい。」と、村の人たちが口々に言ひました。男は、豫期した通りみんながやつて來ましたから、得意になつて、

「さあ上つて見なさい。なかなか、機械のいゝ時計なんだから、この時計ばかりは安心していゝのだ。」と言ひました。村の人たちは、時計の形が變つてゐましたので、

「やあ、これは珍しい。」と言つて、その時計の前に頭を集めて褒めそやしました。

しかるに、不思議なことには、どうしたことか、二人の金持の時計は約三十分ばかり時間が違つてゐました。どちらが

違つてゐるのか、誰もそれを知ることができないのであります。

「この時計は狂つてゐない。標準時に合つてゐるのだ。」と、一人の金持が言ひますと、
「この時計こそ合つてゐるのだ。上等の機械で、町の時計にちやんと合はして來たのだ。」と、他の金持が言ひました。二人の金持は、互に自分の時計を正しいと言つて譲りませんでした。ちやうど二つの時計は、嚴かな掟のやうに、村の者は二つに分れて、一方は甲の金持の時計を正しいと言ひ、一方は乙の金持の時計を正しいと言ひました。
今迄平和であつた村が、時計のために二つに分れてしまひ

ました。時計は神様のやうになつてしまつたのです。「今夜六時から集る」と言ひ合しても、一方の者は乙の金持の時計が六時になると會場に集りましたが、一方の者は甲の金持の時計が六時にならないので集りませんでした。二つの時計の時間が三十分あまりも違つてゐましたから、前に集まつたものは、後から來た者に對して、小言をいひました。「私たちは、ちゃんと六時に來たのだ。こちらの時計に狂ひはない筈だ。それは、お前さんたちの時計が間違つてゐるからだ」と、後から來た者は言ひました。「いや、私たちの方の時計は間違つてゐない。お前さん

たちの方の時計こそ間違つてゐるのだ」と、前に集つた者が言ひました。「時計は神様のやうになつてしまつたのです。かうして、時計によつて雙方が争つたのです。待つてやつて、理窟を言はれるやうぢやつまらない。早い甲つさと時間が來たら、仕事を始めてしまふがいと、早い時計を信ずる組は、後れた時間を信ずる者にかまはずに、相談を進めるやうになりました。こんなやうなことで、常に時間から、雙方の争が絶えませんでした。そのうちに、ふとしたことから、乙の方の時計が壊れてしまひました。今まで毎日廻つてゐた針が全く動かなくなつてしまつたのです。神様のやうに、その時計を信

じてゐた乙の方の組は、その日から眞暗になつたやうに、全く時間といふものが分らなくなりました。さうかといつて、今まで争つてゐた甲の方へ行つて、時間をきくのも恥を感じましたから、
「私たちには、もう時間がないのだ。」と言つて、村の相談があつても、時刻が常にまとまりませんでした。
甲の組は、流石に自分たちの方の時計は狂はない正しい時計だと、いよく、その時計の有難みを感じた譯です。かうなれば、乙の組の者も此方に従はなければならぬと思つてゐました。それで、相談がある時は「午後六時より。」といふやうに時間を定めて、乙の方へ通知をいたしました。けれど

も時計を持たなくなつた乙の方は、六時がいつであるか分りません。こんなことで、いつも相談がはかどりませんでした。

時計が二つあつた時よりも、一つになつた時の方が、村の纏まりが付かなくなつたのです。甲の方も案外乙の方が自分たちに従つて來ないのを知ると、困つてしまつたのです。

「町へ行つて、時計を直して來なければならぬ。」と乙の方の一人が言ひました。

「直したつて仕方がない。壊れるやうな時計は、もう信用することが出來ない。」と、他の一人が言ひました。
「さうすれば、どうしたらいいのか。」

「壊れない、いゝ時計を探して来るより仕方がない。」

「そんないゝ時計は何處へ行つたら見付かるだらうか」と、乙の方は寄るときはると口々にその話をしたのであります。乙の金持は、

「今年酒がよく造れたら、遠い町へ行つていゝ時計を買つて來よう。」と言ひました。さうしてゐるうちに、ふとある日のこと、甲の方の時計も壊れてしまつたのです。自分たちの方の時計は決して狂ふことはないといつて威張つてゐましたが、遂にその甲の方の時計も壊れてしまつたのです。「やはり、時計なんかといふものは駄目だ。直に壊れてしまふ。信用の出来るものではない」と、一人が言ひますと、「時計があつたつて、なくなつて、この一日には變りがないぢやないか」と、他の一人が言ひました。甲の方では、乙の方の時計も壊れてしまつたのだから、今更急いで新しい時計を町へ行つて求める氣にもなりません。乙の方でも、甲の方の時計が壊れたと聞いて、今更町へ行つて、新しい時計を求めるといふ氣持が起りませんでした。村はいつしか時計のなかつた昔の情態に復つたのです。そして、頼るべき時計がないと思ふと、皆はまた昔のやうに大空を仰いで太陽の上り工合で時間をはかりました。そして、それは少しの不自由をも彼等に感じさせな

まふ。信用の出来るものではない」と、一人が言ひますと、「時計があつたつて、なくなつて、この一日には變りがないぢやないか」と、他の一人が言ひました。甲の方では、乙の方の時計も壊れてしまつたのだから、今更急いで新しい時計を町へ行つて求める氣にもなりません。乙の方でも、甲の方の時計が壊れたと聞いて、今更町へ行つて、新しい時計を求めるといふ氣持が起りませんでした。村はいつしか時計のなかつた昔の情態に復つたのです。そして、頼るべき時計がないと思ふと、皆はまた昔のやうに大空を仰いで太陽の上り工合で時間をはかりました。そして、それは少しの不自由をも彼等に感じさせな

かつたのです。時計が壊れても、太陽は決して壊れたり狂つたりすることはありませんでした。

「時計なんかいらぬ。お天道様さへあれば澤山だ」と、言つて、皆は始めて太陽を有難がりました。そして集會の時刻も太陽の廻り工合できめましたために、皆はまた昔のやうに一致して、いつとなく村は平和に治つたといふことがあります。(未明童話集)

徳富健次郎

文學者

蘆花と號す

昭和二年歿す

一〇 村の秋

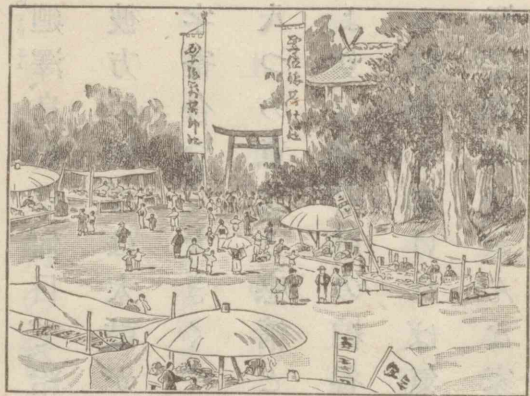
徳富健次郎

秋は農家の祭日、大事な交際季節である。日風の心配もどうやらかうやら通り越して、まづ收穫の見込がつくと、何處の

粕谷
廻澤
烏山
給田
八幡山
作者の居村東京府北多摩郡千歳村の字
東京市の西郊凡そ三里

村でも祭をする。木戸錢不用千客萬來の芝居・お神樂、それが出来なければ、詮方なしのお神酒祭。今日は粕谷、明日は廻澤、烏山は何日で、給田は何日と、皆が指折り數へて浮立つ。彼方の村では太鼓が鳴る、此方の字では舞臺掛け。一村八字寄合つて、大きくやればよさうなもの、八つの字には八つの意志と感情と歴史があつて、二百戸以上の烏山は素より、二十七戸の粕谷でも、十九軒の八幡山でも、各自に自家の祭をしなければ氣が濟まぬ。

祭となれば、どんな家でも強飯を蒸す、糞染を拵へる、饅飴を打つ、甘酒をつくる。そして、他所の親類縁者を招く。今日は此方のお神樂で、平生は眞白な鳥の糞だらけの鎮守の宮



も、眞黒になるほど人が寄つて、小間物屋・菓子屋・鮎屋・おでん屋・水菓子屋などの店が出る。神樂は村の能狂言、神職が家元で、村の器用な若者等が神樂師をする。無口で大兵な鐵さんが、氣輕村に太鼓を打つたり、氣輕な龜さんが、髮髯蓬々とした面を被つて、眞面目に舞臺に立ちあはだかる。「あゝありや龜さんだと、まあ」と可笑盛りのお島が笑ふ。今日自家の祭に酒に酔うた仁右衛門さんが、明日は透綾の羽織でも引つかけて、寸志の紙包を懐中して、隣字の芝居へ出かける。毎日近處で

顔を合せて居ながら、畑の畔の立話にも、今日は「今日は」と、抑、天氣の挨拶からゆるくと始める田舎氣質で、仁右衛門さんと、隣村の幹事の忠五郎さんとの間には、芝居の科白の受取渡しよろしくと云ふ挨拶が、鄭重に交換される。輪番に主になつたり客になつたり、呼びつ呼ばれつ、祭は村の親睦會である。祭が繁昌すれば田舎は長閑である。稲の秋となる。地は再び黄金の穂にあかるく照り渡る。早稲から米になつて行く。性急に百舌鳥が鳴く。日が短くなる。赤蜻蛉が夕日の空に數限りもなく亂れ飛ぶ。柿が好い色に照つて来る。ある寒い朝ふと見ると、富士の北の一角に白いものが見える。

コップ
Cup

北原白秋
詩人
名は隆吉

雨が續く。 雑木林に茸が出る、 野ら仕事をせぬ腰の曲つた爺さんや、赤兒を背負つたお春つ子が、箆を抱へて採りに来る。 檜茸・しめぢ、稀には紅茸、初茸はめつたにない、多いのが油坊主と云ふ茸だ。 一雨々々に氣は冷えて行く。 田も林も日々色づいて行く。 茶の花が咲く。 雑木林の檜にからむ自然薯の蔓の葉が横になり、藪からさし出る白膠木が眼ざめる様な紅になつて、お納戸色の小さなコップを幾つも列ねて龍膽りんたうが咲く。(み、すのたはごと)

一一 専心

北原白秋

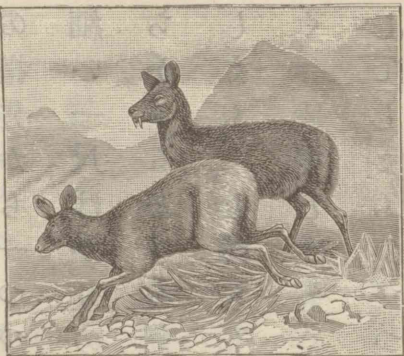
麝香の鑑定をする支那人の話が面白い。

それは神わざに近いものである。 一體麝香と云ふものは、麝香鹿の腹部にある囊に這入つてゐるもので、其の這入つた儘の囊を圓く削り抜いて麝香商の處へ賣りに来る。 それが非常に高價な所から、賣る方でも此の頃は愈、狡くなつて、囊の中に鉛を入れて、知らぬ顔で持つて來るといふのである。 其の鉛の入れ方も、愈、巧妙になつて來て、たゞ天秤にかけたゞけでは、其の重さと云ひ、香と云ひ、色艶と云ひ、正眞正銘の麝香と寸分も見わけがつかない。 そこで麝香商の店にも、其の鑑定をする男を一人、必ず雇ひ入れてあるさうである。 其の鑑定の仕事が又悠長なものである。 其の男は一方の掌の上に本物の麝香を載せ、一方の掌に新しいの

ナイフ
knife

を載せると、両手を互にゆつくりと上げ下げしてゐる。唯それだけで、其の兩方の重さを掌の中で上げ下げしながら量つてゐる。さうして、それが本物か、いかさま物か、愈、どちらか解るまでは、一時間でも二時間でも、半日でも両手を唯上げ下げしてゐる。時とする、手の上の麝香を入れ換へて見たり、又元の手に移して見たりしては、唯上げ下げして居る。全く氣の長い話であるが、それでもちやんと解つてしまふから驚く。そこで愈、怪しいと極めてしまふと、いきなり鋭いナイフを執つて、ぐいと其の囊の中へ突込んで、きり／＼と割つて、ぼんと鉛を放り出してしまふ。其の鑑定が又千に一つの外れは

無いと云ふのだから、猶更驚くのである。



麝香鹿

其の掌の上の觸覺の微妙纖細な事は、唯それだけを鍛へ抜いたお蔭とはいへ、全く技、神に入ると言つていゝ。これは驚くべき一種の專心の賜である。由來支那人と云へば、流石に大陸の間だけあつて、萬づ大まかで、如何にものろ／＼してゐるが、其の専門的の事にかけると、全く小賢しい國民などの思ひも寄らぬ妙技を發揮する。是は専ら専心な鍛鍊の結果で、何事も其のねばり強い執着と大愚に近いまでの氣長な修道心から、遂には

人間以上の不可思議にまで達したのである。金銀の鑑定なども、それは鋭いものだと言ふ。それなども、手の平に、金貨、銀貨を一杯に取りまぜて載せると、其の五本の指先から一つづつ面白い程早く落して行く。右手には細い一尺ばかりの鐵火箸やうのものを持つて、一つづつ落ちかゝるところを、怪しいと見ると、ちいんと弾き飛ばしてしまふ。それも千に一つの間違も無いと言ふのだから驚く。是などは全く指先の感じから落ちかゝるとすぐ直覺してしまふので、つまり専心修練の結果である。それでをかしい事には、さういふ麝香や金銀の鑑定をする男は、唯それだけの者で、世の中の事も知らなければ、何一つ

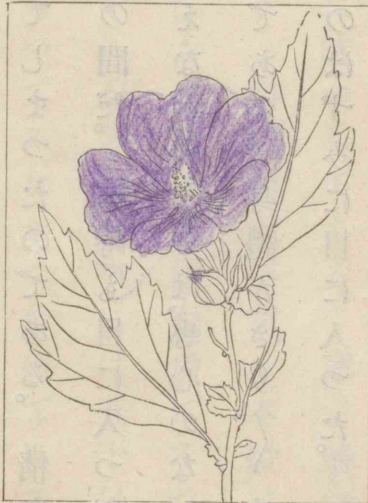
出来ないで、其の事以外はたゞのろくろと遊びほうけて居るばかりだとの事である。唯一日中御馳走を食べて、掌を上げ下げしたり、鐵の棒でちいんとやるだけださうである。九州へ旅した事のある人が、何かの話の序に、あちらの女はえらいと感歎するのを聞いた。それは敏感であるとの事である。私も或時、旅宿で食事の時、割箸を割り損つてぼきりと音を立てた。それは傍に居る人でも気が付かないくらいなの、幽かな一寸した音に過ぎなかつた。それであるのに驚いた事には、もう座を立つて梯子段のきはまで下つて行つた女中が、はつと向き直ると、御箸が折れましたか、相済みません、今すぐに持つて参ります」と言つた。それはく

細かなものである。一體人は目に物を見ながら頭に入れて居ない事が多い。私が外科の手術を受けて、永い事下町の或病院に入つて居た時の事である。窓の前の中庭には檜と楨が二本あつて、その間に物干竿が一本掛け渡してあつた。何時も其の方ばかり眺めて居たので、それが目に付かなかつた譯は無い。それが驚いた事には、五十日餘りといふもの、全く頭の中に入つてゐなかつたのである。或日雨がびしょ／＼降つて、非常に陰氣な午後であつた。手術の創痕が其の日は取分けてきり／＼痛む。あゝ痛い／＼、あゝ痛い、あゝ／＼と思つて庭の方を見て居るうちに、其の青い竿がはつきりと目

に見えて來た。おや、あんな竿が有つたのかと思つて、私は思はず目を瞠つたが、五十日の餘もそれを見て居ながら少しも氣がつかかなかつた自分の迂濶さ加減には、猶更吃驚してしまつたのである。情ないことだと思ふ。つい目と鼻の間だ。何時も目に入つてゐたにちがひない。それが見えなかつたのは、専心のない、何時もの空虚な心でゐたからである。身體がきり／＼痛むので、心が痛む、鋭くなる。其のはずみに目に入つた。そこでやつと心に焼き付けられたのである。私たちは何時も目に見た物を、何時も目ばかりでなく心に徹して、其の心の眼でしかと見据ゑるだけの引締つた心で

ありたいのである。名人は瞬かす、そこに隙が一つあつてもいけないのである。

阿古屋貝が病氣をすれば眞珠が生れる。人も眞實に憂へ



れば其處で心の眼が開ける。必要するに人間の心は、何時も苦くみと憂ひとの中に、きりく痛げんで居なければ決して磨かれはせぬのである。又何事につけても其の痛さを痛切に感じ得る心でなければ、いゝ心とは言はれない。かうした考から、時には雀もありがたい。

私が住んで居た二階の窓の向ふに、木槿の垣根が在つた。

毎朝白い木槿の花は開いてゐたが、私は毎朝それを眺めて

ゐながら、さのみ心には留めて居なかつた。

或日、何氣無く眺めて居ると、雀がはらくと一羽飛んで來

た。すると木槿の枝に來て留らうとした雀が、どうしたも

のかついとそれてしまつた。枝が動いてゐたのである。

私もはつと氣が付くと、枝と一緒に白い木槿の花も、しみじ

みと動いて居るのを見た。ひどくは揺れてゐなかつたが、

しみじみと動いて居た。風が有るなと私は思つた。雀の

機縁で、始めて私の心もはつと眼が覺めたのである。さう

して、私も心から其の白い木槿の花が、絶えず風に動いてゐ

る悲しさを識つた。それから本當に白い木槿の花をあは
れだと、私の眼の底に焼き付けられてしまつた。物には
専心が大切であるが、其の専心をつかまへることが
なか／＼出來ないのである。(洗心雜話)

一二 永代橋

深川富岡八幡宮の神事は、江戸にては山王神田の兩祭に次
ぎての祭禮なりき。文化四年八月十五日、其の神殿新に成り、三十餘年間中絶し
たりし祭禮を行はる。氏子各町の意氣込大方ならず。各
競うて山車を出しなす。

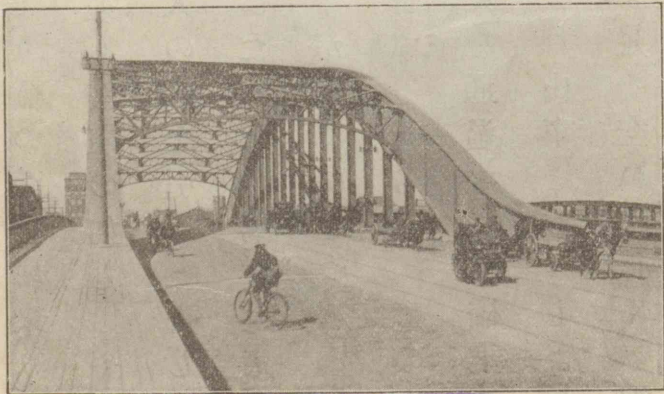
永代橋
東京市京橋區大
川端町と深川區
相川町との間の
大川に架した橋
山王祭
麴町區永田町日
枝神社の祭
神田祭
本郷區湯島宮本
町神田神社の祭

身延山
甲斐國身延山久
遠寺
日蓮宗の本山

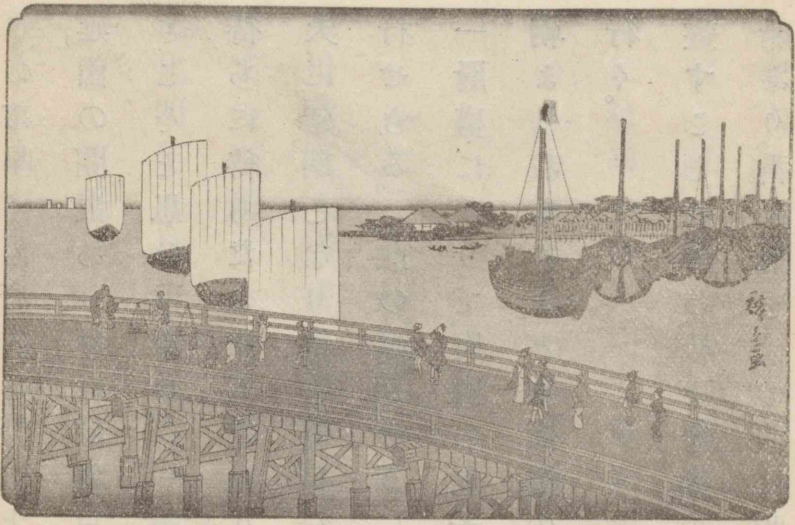
この事早くも府内の評判となれる折柄、深川靈岸町には、身
延山の開張ありければ、當日の雜沓
さこそと思ひ遣らる。

待ちに待ちたる十五日は、生憎の雨
天に延期となり、愈十九日祭禮は舉
行せらる。此の延期の爲に人氣は
一層盛になりて、府内の老若男女、早
朝より我も／＼と永代橋の方へ押
行く。

晝すこし前ごろ、橋下を通る貴人の
船あり、番人、繩を橋の袂に張りて、一切諸人の通行を許さず



全の永代橋



昔の永代橋 (安藤廣重筆)

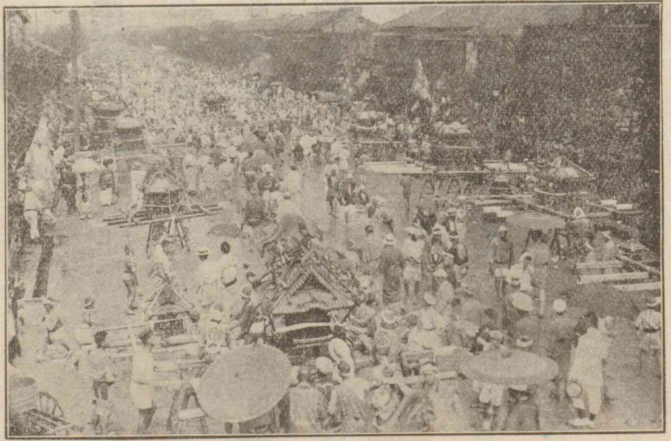
ること小半時。此の間北より、南より、橋の西詰に來り集る者、宛ら雲霞の如し。やがて番人の繩を引くと齊しく、待侘びたる幾千萬の大衆、潮の涌くが如くに、どつと橋上に押寄す。折も折、一臺の山車、橋東を通過すれば、橋上の男女、それ山車と、わつしよわつしよ、足を空に押行く。細く長き假橋のいかでかかば

争ひか

入相

ねよとの鐘
鐘
鐘

かりの重量に堪へ得べき、忽ち橋の東詰一間を残して長さ十二間許り、めりくと二つに折れて、どつと水中に崩れ落つ。數百人の男女、橋と共に轉び落ち、浮きつ沈みつ悲鳴を揚げて救助を呼ぶ。橋上の男女、これはと驚きて引返さんとす。されど後より、押し寄せ來りて、止めんに由なく、續いてぞろろくと落込む者夥し。此



深川八幡祭禮

に七百八十人、其の内、四百四十人は遂に蘇生せざりきとい

ふ。



なし。」と思ひ、本意なくも、其の儘歸宅して自棄半分に打臥せ

深 永代橋の墜落に就いては、種々なる
川 悲劇と與に、また喜劇もありき。本
八 郷に住める麴屋の主人、祭禮を見ん
幡 町に差懸りし時、ふと心付けば、懐中
宮 の紙入、何時の間にか紛失して見え
ず。扱は掏兒に取られしならん、二
兩二分の金、取られては祭見ても詮

り。夕方に至りてふと目を覺せば、人々の語り罵る聲々耳
にかしまし。怪しみ問へば、永代橋の墜落にて、時刻は恰も
我が渡りたるべき刻限に當れり。
僥倖にして死を免れたるを喜びしに、翌日、突然、奉行所より、
主人の死體引渡すべければ、早々出頭すべき旨の命あり。
合點行かずと出頭し、自分は此の通り存命なる由申し立つ
れば、然らば此の品物に覺無きか。と彼の紙入を示さる。改
むれば二兩二分の金子も昨日の儘なり。主人は、昨日掏ら
れし事の由を述べれば、役人は横手を打ち、それにて讀めた
り。此の紙入、あれなる屍體の懷中に在り、中を檢すれば其
の方の住所氏名を記したる書付のありたれば、正しく其の

ローレライ

Loreley

黑板勝美

史學家

文學博士

東京帝國大學教

授

オパーウエゼル

ライン川の

中流ビンゲ

ン市より少

し下つた處

にある町の

名

Oberwesel

ライン川

スイスから出て

ドイツの西

部を流れオ

ランダに入

り北海に注

ぐ長さ八百

五十哩

E. Rhine

方の屍體ならんと思ひしに、さては、彼の者、其の方の紙入を
掘り取り、其の儘深川へ赴く途中橋梁墜落の爲、横死を遂げ
たるものならん。好しく、懷中物は其の方に下げ遣はす。
といはる。主人は一命は助かる、金子は戻る、有難しく、と
て其の冥加を喜びたりといふ。(江戸懷古録に據る)

一三 四 ① ロレライ

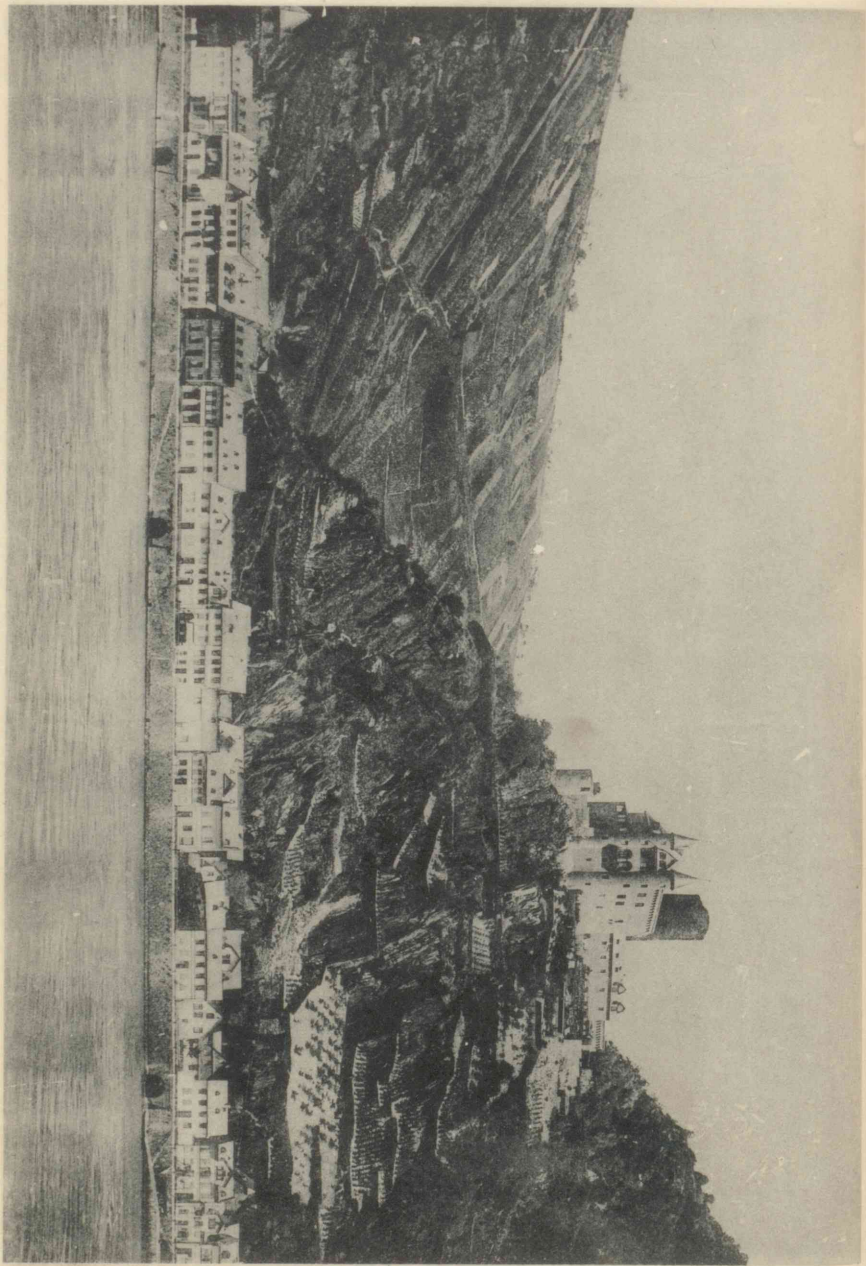
黑板勝美

オパーウエゼルを過ぎるとライン川は大屈曲をなして一
大奇勝を形作り、夢寐にもあこがれたローレライの巖は眼
前に現れた。ラインに遊ぶ者で、此の巖を見ずして歸る事
があれば、家人は其の人を家に入れないとまで言はれてゐ

るのがこれである。灰色の奇峭な巖山が河の東岸に聳え
てゐるのを見上げて、船客みな「ローレライの巖だ」と口々に
いふ。

今は昔、日暮れて蒼白い月影がラインの流を照らした折々
此の巖頭に夢のやうな柔かな歌の聲が聞えて、やがて現れ
る氣高い神女があつた。行きかふ船人が、心も空に其の姿
に見とれてゐる間に、巨浪忽ち起つてその船を沈めてしま
ふ。斯くて何人も此の神女に近づくことが出来なかつた。
そして夜毎々々柔かな低い歌聲は斷續して霧立ちこめた
曉に及んだ。
此の地方のさる大名の若殿に、ローナルドといふ勇士があ

つた。此の噂を傳へ聞いて、或日狩獵に託して、屈竟な老船頭を雇ひ、輕舟に乗じて此の巖へと向つた。黄昏がいつしか谷を包んで、日は彼方の山の端に沈み、靜かな夜の色の中に空の星影の牙え渡るとき、舟は此の巖の下に漕ぎつけられた。彼は瞬もせず巖上を見つめてゐる。「ローレライ、神女の姿」とさゝやく低い老船頭の聲とともに、ローナルドが眼にあり／＼と映じた神女の影。其の氣高さ。丈にもあまる金髪、風にひるがへる白き袴。一目見た若殿の魂は忽ち其の氣高さに打たれた。彼の前には巖壁も無ければ、彼の下には流水も無い。たゞ沈々たる月夜はおぼろに霞んで、彼の目に入るものは、その名を囁



河 々 々 々

くやうな神女の聲である。忽ち若殿の叫び聲は巖に響いて、その姿は激流に消えて行方も知れずなつた。

此の時雲間を破つて閃く電光、耳を劈く雷鳴に、老船頭は暫し茫然として自失したが、漸く我に歸れば天は忽ち晴れて巖が根に打寄する浪の音に、ローレライの歌聲が響きあつて居た。

此の報を得た父君の驚愕、悲歎、憤怒は譬ふるにもものもなかつた。嚴命一下、勇敢な青年數人は直ちに派遣せられた。早船は矢の如くラインの流を下つて、此のローレライの巖へと近づいた。巨人の如く立てる斷巖が刻々に暮色に包まれ去る時、一隊は勇を鼓して登り行く。巖頭に映ずる夕

陽の影かと見たのは、常の如く金髪を風にそよがせて姿を現せる神女の光明であつた。神女はやがて胸なる眞珠の鎖を解いて其の額に捲き、一隊の勇士を嘲るが如く一瞥した。「地上の弱き青年等よ。卿等は此處に何を求めんとして來れるか」と神女の唇は動く。「汝悪魔よ。われらは汝を水底に突き落さんが爲に來る。」と隊長は怒の聲高く叫びつゝどつと笑へば、反響は山のあなたに又どつと笑ふ。

「嗚呼ラインの河は、今われらはを召す」と神女は巖頭に立上り、谷底を望みつゝ眞珠を執つて水中に投捨て低い清らかな調で歌ふ。

懐かしき父上よ、急ぎ給へ、ラインの清き流より

急ぎて駿馬を送りたまへ。

浪よ立て、風よ吹け、此の立つ浪と吹く風と、

われらははみましの許に行かん。

歌終れば一陣の暴風起つて、川浪俄かに岸を覆ひ、二條の波濤雪より白き駿馬の如く、水底より立上るよと見る間に、神女を包んで激流の中に没してしまつた。

この時からローレライの神女は、絶えて其の氣高い姿を現さない。只夜色沈々として蒼白き月影が深緑の水面を照らす時、此の巖下を過ぐる舟人は、幽かな調で歌ふやうな聲を聞くといふことである。

嗚呼ロレライの神女は、この地を去つてしまつたが、詩人に歌はれ名畫に描かれて、世界の人の胸に今もなほ残つて居る。天下の好山水は必ずしもラインに限らないが、この神話に依つてラインの風光は永く人の感懷を深うして居る。(歐米文明記)

一四 卑下

脈

ある處に我が身をむやみに卑下する下女あり。その家の内儀、風を引いたりとして、常にねんごろなる醫者を呼びて、脈を見て貰はるゝ序に、下女を呼びて、そなたも心地がすぐれ

ぬといやる。先生に見てお貰ひなされ」といへば、かの下女例の卑下して、なんの私等風情に脈がござりませう」というた。(輕口浮瓢筆)

傘

傘を張りならひ、七八本張上げしが油引いてから一本もすばまらず。これはつまらぬとむりに疊めばばりくと裂ける。どうしたものぢやと困りしが、折柄の夕立。「しや、よい思付がある」と、傘をひらいたまゝ、迂へ持つて出で、それ廉い、負けた」と賣りかけしに、何が俄雨のことなれば、大勢集り、ばひあふやうに買うて行く。「こりやうれしや」と内へ走り歸り、思付をやつて傘を殘らず賣つて來た」といへば、隣

の人が「それはよかつた。いくらで賣つたぞ。」南無三、餘り急いで錢をば取らずにやつた。」(落語選)

壺

粗忽者壺を買ひにいつた所がうつぶけてあるを見て、此の様な口の無い壺があるものか」と云ひながら、ひつくりかへして「これく、底も抜けて居る。」(落語選)

一五 頓智救命

昔、英國にジョンと申さるゝ王ありけり。性残忍にして、思ひやりの心なかりき。その頃、カンタベリーの町に、老僧正あり。壯麗を極めたる僧院に住し、驕奢至らざる所なく、日

ジョン
John
(1167—1216)
カンタベリー
ロンドンの
東南六十二
哩ばかりの
處にある
Canterbery

日百人の貴人を集めて饗應し、華美に装ひたる武士をして侍らしめたり。

ジョン王これを聞いて大いに怒り、僧正を召し、叱して曰く、「朕が領内に在るものは何人たりとも朕に勝れる生活を爲すべからず。汝これを知らざるか。」僧正對へて曰く、「微臣只樂みを朋友にわかたんと欲するのみ。且、臣は臣が所持の物を費すのみにて、少しも累を他人に及すにあらず」と。王、聲を勵まして宣ふやう、「凡そ朕が國土にあるものは、一として、朕が所有たらざるはなし。汝、今朕が物を費し、朕に勝れる生活を爲す。思ふに、汝は朕が位を奪はんと欲するなるべし。」僧正惶懼して、「否、臣何ぞ異志を抱き申すべき」と述

ぶる言葉もくごもりたり。
 王聞きも果てず、だまれ、僧正。汝の罪は明白なり。命惜しくば、朕が三つの間に答へよ。答若し誤らば、身首處を異にし、所有の物は一切没收せらるべし」と宣ふ。僧正、奉答し得べしや否やは測られねど、願はくは、試みさせ給へ」と申す。
 「然らば、問はん。一日以内に答ふべし。朕が壽命は何時盡くるか。これ一つ。朕、馬に騎りて一日のうちに世界を一週せんと欲す。何程の速度にて走らば可なるか。これ二つ。朕は何を思へるか。これ三つ。」僧正驚き惑ひて、「聖旨深遠なれば、一日以内には對へ奉り難し。かしこけれども、大王、仁愛天の如く、寛大海の如し。願はくは、二週間の猶豫

を賜へ。」と哀願しければ、王これを許しぬ。

僧正御前を退き、憂慮措くこと能はず。馬をオクスフォード大學に馳せて、學者の智慧を借らんとせしが、皆首を振りて曰く、「われらの講ずる書には、王の間に對ふべき答なし」と。去つてケンブリッヂ大學に至りけれども、亦同じ。僧正失望いはん方なく、死を期してすごくと馬首を回らしけり。枯木の梢に鳴く鳥、草むらにすだく蟲、見るもの聞くものにあはれを催して、たそがれの鐘の音かすかに響く時、僧正はわが家に近づきたり。と見れば、此方に來るはわが牧場を管理する牧人なり。僧正を見て、「臺下、今歸り給へりや。王宮には如何なるよき事か候ひつる」といふ。僧正は、「悲惨悲

オクスフォード
 大學
 ロンドンの
 西凡そ六十
 三哩テーム
 ス河の左岸
 にある
 Oxford
 ケンブリッヂ大
 學
 ロンドンの
 東北五十八
 哩の處にあ
 る
 Cambridge

慘」と叫びて、ありし次第を物語りぬ。

牧人はいと憐がりて聞き居たりしが、やゝありて「愚者も賢者に智慧をかす」といひも果てぬに、僧正思はず聲高く、「汝に如何なる智慧かある。とく語れ」と宣ふ。「さればなり。人みな某の風采を臺下に肖たりといふ。臺下、しばらく某が臺下の服装を擬するを許し給へ。某直ちに都に上り、王に謁を請ひ、奉答を試むべし。事若し成らずば某が命を失はんこと固より悔ゆる所にあらず」と、誠心面に溢れたり。僧正大いに喜びて、事を託しつ。こゝに於て、牧人は法衣を纏ひ、僧冠を戴き、錫杖をつきて立ちければ、あつばれまことの僧正とこそは見えたりけれ。

この僧正、やがて倫敦に行きて、王に謁見す。王嚴かに宣ふやう、「いかに、僧正。然らば、第一問に答へよ。僧正かしこまりて、陛下よ。畏くも、陛下は崩御の日まで御命を保ち給ひ、それより後は一日もながらへ給ふべからず。最後の御息を引取らるゝ時に崩御ありて、それよりは一分たりともこの世におはしますことなし」と申したり。王は笑ひて、「汝は巧にも申すものかな。然らば、この問はそれにて可なりとせん。第二問は如何に。」僧正徐ろに申すやう、「陛下。日出に起きいでたまひて、太陽が明朝東天に昇る時まで太陽と同行せさせ給へ。二十四時間にして世界を一周し給ふべし。」王大笑して、「實に然り。汝は賢きものなり。これも可

下村海南

名は宏

法學博士

大阪朝日新聞社

専務

前臺灣總督府民

政長官

支倉

支倉六右衛門常

長

伊達政宗の臣

慶長十八年歐洲

へ出發イスパニ

ヤ・ローマ等に

いたり元和六年

歸朝元和八年

(二二八二)歿す

ヴァチカン

ローマ法王

の宮殿

Vatican

ローマのチ

ベル河の右

岸なるヴァ

チカン丘の

上にある

ローマに安着

今日

大正十四年

大正十五年

河内飛行士

名は一彦

一等航空士

訪歐飛行士の一人

四勇士

安邊少佐

河内飛行士

片桐機關士

篠原機關士

エピソード

挿話

Episode

なり。然らば、次はいかに。「こはいとやすき御問なり。陛下は臣をカンタベリーの僧正とおぼしたまふなり。」と對へて、さて申すやう、臣は只賤しき牧羊者なり。願はくは、寛大なる大御心をもつて僧正並に微臣の罪をゆるし給へ。」といひつゝ、法衣を脱ぎすつれば、全く似而非僧正なりければ、王は驚きあきれて、言葉なし。「やゝありて、汝は面白き男なり。」とのたまひて、この牧人に褒美の金を取らしめ、僧正をも免じければ、牧人は喜び勇みてカンタベリーにぞ歸りける。

一六 色紙の勳章

下村海南

支倉の後四百年ひんがしの

勇士ヴァチカンの廣前に立てり。

訪歐飛行の初風東風の二機が、無事ローマに安着した十月の二十七日。今日は伊勢大廟から飛來した河内飛行士をはじめ、航空に關係ある人々により、新築の朝日會館には壯圖完成一週年の記念講演會が開かれる。光陰は飛行機の如し、觀じ來れば實に一場の夢である。追想すれば、代々木原頭に四勇士を送るまでも、神戸埠頭に四勇士を迎へてからも、その間に涙ぐましいエピソードは數限りなくある。こゝに京洛における四勇士歡迎の一日を記して、今日の思ひ出とする。

この喜びいかにたへん、夢にあらず、生きて歸りしよ。わがますらをは。

天地の神の御恵み國たみの

たすけありてぞ今日の日ありし。

訪歐飛行の四勇士が無事に歸朝した歓迎の幕が引き切りなくつゞいてゆく。大正十五年一月二十六日、四勇士は平安神宮の参拜を終へて、官民聯合の歓迎會に臨み、午後に入りて更に東西本願寺よりの招待とある。

七條のステーションに降りると、眞直に北へ急ぐ道すがら、いつも門前を素通りする東本願寺。京都の下り汽車の窓

平安神宮
京都市上京區岡崎町にある官幣
大社
桓武天皇を祀る

七條のステーション
京都驛のこと
七條通にある

から、それあの高いのがと指さされて、たゞ屋根だけが見覺

えに残つてゐる西本願寺。その東西本願

寺で歓迎とある。私が官服を脱いで新聞

社にはひる、その新聞社で思ひも設けぬ訪

歐飛行といふ夢のやうな計畫を立てる、そ

の夢のやうな計畫が機縁となつて、こゝに

始めて東西本願寺の参詣となる。實にや

水の流れと人のさだめである。

東本願寺前のあの廣い大通りから境内の

廣場へかけて、底冷えのする寒いく、京の

街も、こゝばかりは熱狂せる群集が歓迎旗を打振り、訪



安邊飛士



河内飛行士



片桐機關士



篠原機關士

歐の四勇士に萬歳々々の聲を浴せかけてゐる。寒い、寒い、いかにも寒い。案内する者、案内される者、三々五五長い廊下を右に左に、たゞ黙々としてつながつてゆく。薄暗い見上げるばかりの廣々とした御影堂みかげだうに入れば、歡迎の大衆は影の形を追ふ如く、四勇士めがけて外陣の中を右に左になだれどよもしてゐる。

書院より御堂につゞく高廊下

人みなもだしさむくとゆく。

稻葉昌丸
東本願寺事務總長
光暢法主
東本願寺法主
眞宗大谷派管長
伯爵

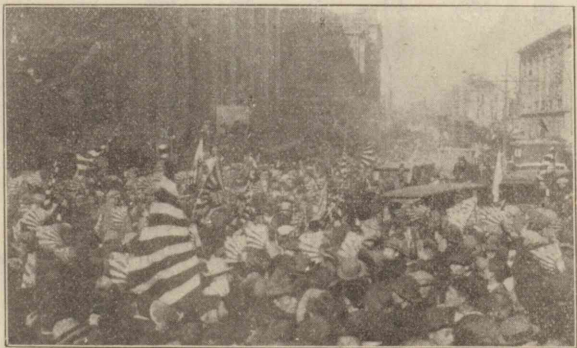
禮拜も終へて書院の一間に招じられる。事務總長稻葉昌丸師の歡迎の辭に次いで、光暢法主には親しく四勇士に訪歐の大使命の成就と佛陀の加護につき懇切なる挨拶の詞

があつた。

新法主
伯爵大谷光暢
句佛上人
前東本願寺法主
大谷光演の俳名
光暢の父

大伽藍に續く高廊下の傍に、山の如く積み上げられた、善男善女が寄進せる毛綱を見て、信仰に燃える門徒の根強き力に驚嘆した私は、法燈ほとうこゝに二十四世、うら若き新法主と、勿體なや祖師は紙衣かみえの九十年」と詠んだ前法主の句佛上人とを想ひつゝ、火桶にかじりついてゐる。全く寒い。

西本願寺。冷々した薄暗い書院の一間には、ところ／＼大きな火鉢に堅炭が盛り上げられて、青



迎歡朝歸士行飛訪歐

い焔がひらくと舞上つてゐる。が何分にも部屋が大きい、襖が開け放しになつてゐる。寒い。黒書院といつたかと記憶する。いかにも黒ずんでゐる中に静かに坐せば、暗い中から襖や壁に描かれた花鳥の一線一線が、次第に浮き上つてくるやうに見える。

黒書院のをぐらき中に燃えあがる

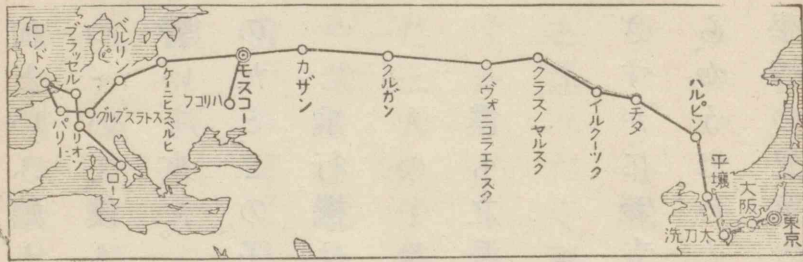
炭火のほのほ青くゆれけり。

座につきて静もり見れば床の間の

壁の墨繪のうきあがり見ゆ。

たしか鴻の間とかいふ大廣間になると、こゝには本山一門の衆はもとより、本派の大學・中學・高女・小學より幼稚園に至

執行長
本多惠隆



訪 歌 飛 行 機 經 路 圖

るまで、先生から生徒、さては父兄姉妹といはず、ぎつしりと群衆が鮎詰めになつてゐる。歓迎の式がはじまると、先づ執行長の委曲を盡した挨拶があつて、大學から中學、高女とそれ〴〵に生徒總代が、順次に立つて四勇士の前に歓迎の辭を朗讀する。次にはち切れさうな赤ら顔の小肥りの元氣さうな小學校兒童總代が、つか〴〵と四勇士の前ではき〴〵した口調で言文一致の率直な歓迎の辭を讀み上げたとき、僕は飛行機が好きです。といふ詞を耳にし、思はず

何といふ嬉しい事をいふものかと感に堪へる。間もなくつゞいて「僕も立派な飛行士になります」といふ詞が、ぴんと響いて來た。明るい詞、勇ましい詞、よくも言つてのけたものだと、この子供の嬉しい嬉しい詞を胸の中で繰返す。

飛行機は僕好きですと勇士の前に

言上げしたり、聞きのよろしき。

僕も立派な飛行士になりますと幼き子が

なにか、はりもなく言ひ放ちけり。

さすがにお寺さんである。同じ歓迎にしても大手搦手から、かうじわくと攻め立てられてはやり切れぬ。この小学校の兒童の無邪氣な歓迎辭に、何となく感傷的になり、胸

が押しつまつて痛くなつて來たところへ、今度は六歳ばかりのかはいゝいたいけなぼつちやんが、自分の席に立ち上つた。心覺えのまゝあどけない歓迎のことばをおどくと述べたが「私たちがお祝に拵へたこの勳章を差し上げますから、どうか受けとつて下さい。」といひをはると、並んでゐた三人の子供がつゞいて立つた。めいゝに赤や黄や青や紫など色とりどりの色紙でつくつた勳章を手にして四勇士の前に進んだときは、四勇士はもとより、満座の人々の眼に涙がにじみ出て來た。そして安邊河内篠原片桐の四人が、心から嬉しく子供の手から色紙の勳章を受取つて、それを言ひ合はさねど各の胸に飾りつけたときには、思はず

満場は嬉し涙をすゝりあげながら、歡喜の聲にどよめいた。
をさなきが色紙の勳章手に持ちて

四勇士の前に捧げけるかも。(四番茶)

一七 幼時の美感

正岡子規

正岡子規
名は常規
俳人
歌人
明治三十五年歿す

極めて幼き時の美は、唯色に在りて形にあらず、まして位置配合技術など、其の他の高尚なる複雑なる美は固より解すべくもあらず。其の色すらなべての者は感ぜず。あつふ(美麗)と嬉しがらるゝは、必ず赤き華やかなる色に限りたり。乳呑子の燈火を見て無邪氣なる笑顔を作りたる、四つ五つの子が隣、の伯母さんに見せんとていと嬉しがる木履の鼻

緒、唐縮緬の帯、何れ赤ならざるはあらず。試におもちや屋の前に立ちて赤の交らぬ者は何ぞと見よ。白毛、黒毛の馬のおもちやにさへ、赤き臺の車はつけてあるべし。

我が幼き時の、美の感じは如何にやと思ひ廻すに、五六歳以下の事は、記憶に残るべき道理無し。我が三つの時、母は我を連れて十町ばかり隔りたる實家に行きしが、一夜は其處に宿らんとて稍寐入りし頃、火事々々と呼びて外を通る聲身に染みて夢覺めたり。すは火事よとて起き出でて見るに、火の手は西南に當りて盛に燃え上れり。我が家の方角なれば、氣遣はしとて、我を負ひながら急ぎ歸りしが、我が住む横町へ曲らんとする瞬間、思ひ掛け無くも猛烈なる火は

我が家
作者は伊豫國松山市に生れた

我が家を焼きつゝありと見るや、母は足すくみて一步も動かず。其の時背に負はれたる我は、風に吹き捲く焰の偉大なる美に浮かれて、はいく／＼(提灯)と躍り上つて喜

受珠抄	のほろ
馬車	(一)
馬車	(二)
馬車	(三)
馬車	(四)
馬車	(五)
馬車	(六)
馬車	(七)
馬車	(八)
馬車	(九)
馬車	(十)
馬車	(十一)
馬車	(十二)
馬車	(十三)
馬車	(十四)
馬車	(十五)
馬車	(十六)
馬車	(十七)
馬車	(十八)
馬車	(十九)
馬車	(二十)

正岡子規筆蹟

びたりと母は語り給ひき飽くまで慘酷なる猛火に對する美惑は如何にありけん、此の時以後再び感ずる能はず。

我が家は全焼して僅かに門を殘したる程なりければ、さなくとも貧しき小侍の家には、我をして美を感ぜしむる者何一つあらざりき。七八歳の頃には人の詩稿に朱もて直し

あるを見て、朱の色の美しさに堪へず、吾も早く年とりて、かかる事したしと思ひし事もあり。こればかり焼け残りたりと云ふ内裏雛一對、紙雛一對、醜く大きな這子様一つを赤き毛氈の上に飾りて三日を祝ふ時、五色の色紙を短冊に切り、芋の露を硯に磨りて、庭先に七夕を祭る時、此等は一年の内にて最も楽しき嬉しき遊なりき。妹のすなる餅花とて、正月には柳の枝に手毬つけて飾るなり。それさへもいと嬉しく、自ら針を取りて手毬をかゞりし事さへあり。昔より女らしき遊を好みたるなり。或時東京に行く某の人に歌カルタを頼みけるに疾く送りこされぬ。此のカルタ好き品にて、我が家には過ぎたりと

人皆言ひしが、其のカルタ痛く我が氣に入りて、年々の正月を待ち兼ねたり。相手無き時は自ら讀み自ら取りて、樂みとす。十二三の頃友に畫を習ふ者あり、羨ましくて母に請ひたれど、畫など習はずともよからんとて許されず。其の友の來る毎に畫を描かせてわづかに慰め居たり。幼時より美に感じ易かりし吾は、我が家の長物一として美とすべき物無きを見て心に樂しまず、如何にして、吾はかゝる貧しき家に生れけんと思ふに、常に他人の身の上の妬ましく感ぜられぬ。

獨り造化は富める者に私せず、我が家を周る百歩ばかりの庭園は、雜草雜木、四時芳芬を吐いて、不幸なる貧兒を憂鬱より救はんとす。花は何々ぞ。南受けたる座敷の庭には、百年をも過ぎたらん櫻の樹はびこりて、庭半ばを掩へり。花稀なる田舎には珍しき大木なれば、彌生の盛りには路行く人足をとめて、かにかくと評し合へるを、吾はひそかに聽きて、いと嬉しく思ひぬ。やからうから打寄りて、花の下に酒もりするも亦榮ある心地す。櫻の下に石榴あり。花石榴とて、花は稍大きく八重にして實を結ばず。其の下の垣根極めて暗き處に木瓜一もとあり、一尺ばかりに生ひたれど、日當らねば花少く、或年は二つ三つ咲く、或年は咲かず、たま〜咲きたるはいと床しかりき。椿あり、つゝじあり、サフランあり、水仙あり、庭の隅に瓦

造りの祠を建て、其の下には菖蒲しやがなど咲きて土常に
濕へり。書齋の前の蘭は自ら土手より掘り來りて植ゑし
もの。

北庭は狹し。芍薬一本、我が庭園中の最も艶なる物なり。
天竺草薄荷などあり。西は家の裏にして畠なり。家に近く蠶豆、豌豆など一畝二
畝植ゑたるが、其の花を見れば心そゞろに浮き立ちて樂し
さ言はん方なし。南瓜の蔓、溜壺に取りつきて、大きな仇
花に虻の絶えざるも好し。梨一本、梅一本あり。梅は薄紅
梅なり。東は井戸端なり。きたなき泥溝あつて、鳥兜は水溜りを圍

みて咲きたり。桃の若木あり。菊一畝ありて、小菊ばかり
植う。

春風暖かに菜の花に蝶飛ぶ頃、多くの童男女打交りて、南の
野へ摘草に行くはこよなく嬉しき遊なり。春は我が世界にして、草花は我が命なり。幼き時より今に
至るまで、野邊の草花に伴ひたる一種の快感は時として吾
を神ならしめんとする事あり。殊に怪しきは我が故郷の
昔の庭園を思ひいだす時、先づ我が眼にうかぶ物は、爛漫た
る櫻に非ず、妖冶たる芍薬にも非ず、溜壺に近き一畝の豌豆
と蠶豆との花咲く景色なり。如何なる故か自ら知らず。
若し小さき神の此の花に宿りて吾を惱まし給ふらんか、い

と覺束なし。(子規遺稿)

島崎藤村

名は春樹
文學者

詩人

一八 落葉

島崎藤村

毎年十月の二十日といへば、初霜を見る。雑木林や平坦な耕地の多い武蔵野へ來る冬、淺々とした感じのよい都會の霜、さういふものを見慣れて居る君に、この山の上の霜をお目にかけてたい。この桑畑へ三度か四度もあの霜が來て見給へ。桑の葉は忽ち縮み上つて焼け焦げたやうになる、畑の土はぼろ／＼に爛れてしまふ、見ても恐ろしい。猛烈な冬の威力を示すものは、あの霜だ。そこへゆくと、雪の方

この山の上
長野縣小諸町

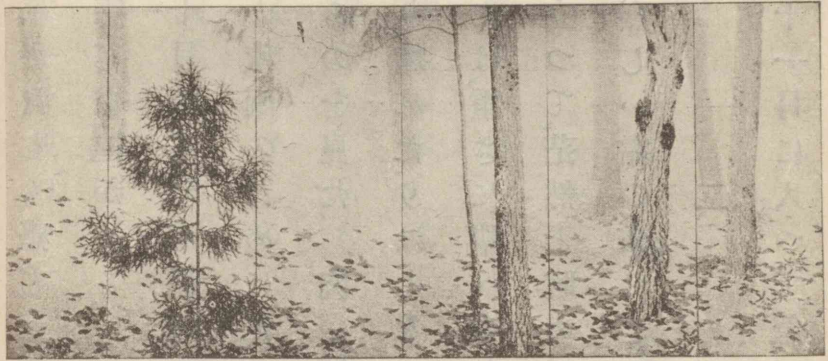
はまだしも感じが柔らかい。降り積る雪はむしろ平和な感じを抱かせる。

十月の末の或朝のことであつた。私は家の裏口へ出て、深い秋雨のために色づいた柿の葉が、面白いやうに地へ落ちるのを見た。肉の厚い柿の葉は、霜のために焼け損はれたり、縮れたりはしないが、朝日があたつてきて霜のゆるむ頃には、重さに堪へないで脆く落ちる。しばらく私はそこに立つて、茫然と眺めて居たくらゐるだ。思つてその朝は殊に烈しい霜の來たことを思つた。

二

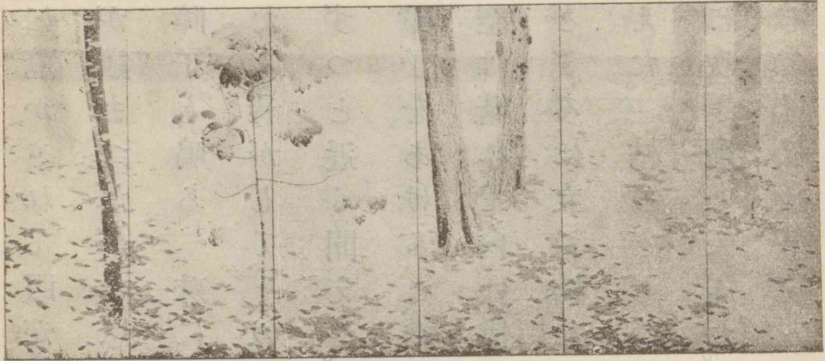
十一月に入つて急に寒さを増した。天長節の朝、起きだし

天長節
明治の天長節
十一月三日



落葉

て見ると一面に霜が来て居て、桑畑も野菜畑も家々の屋根も、皆白く見渡される。裏口の柿の葉は一時に落ちて、道も埋もれるばかりであつた。風はすこしもない。それでゐて一葉二葉づつ静かに地へ落ちる。屋根の上の方で鳴く雀もいつもよりは高く勇ましさうに聞えた。空はどんよりとして、霧のために全く灰色に見えるやうな日だつた。私は勝手元の焚火に凍えた両手を



(筆草春田菱)

かざしたくなつた。足袋を穿いた爪先も寒くしみて、いかにも恐しい。冬の近よつて来ることを感じた。この山の上に住むものは、十一月から翌年の三月まで、殆ど五箇月の冬の寒を過ぎねばならぬ。その長い冬籠りの用意をせねばならぬ。

木枯が吹いて來た。十一月月中旬のことであつた。ある朝、私は潮の押寄せて來るやうな音

千曲川
甲斐信濃の國境
金峰山の麓に發
し佐久平を貫流
し川中島で犀川
と合して信濃川
となる

學校
小諸義塾

に驚かされて眼が覺めた。空を通る風の音だ。時々それ
が鎮まつたかと思ふと、急にまた吹きつける。戸も鳴れば
障子も鳴る。殊に南向の障子にはばらくと木の葉のあ
たる音がして、その間には千曲川の川音も平素から見ると
ずつと近く聞えた。
障子をあけると、木の葉は部屋の内までも舞ひ込んでくる。
空は晴れて白い雲の見えるやうな日であつたが、裏の流の
ところに立つ柳などは烈風に吹かれて髪を振ふやうに見
えた。枯々とした桑畑に茶褐色に残つた霜葉なども左右
に吹き靡いて居た。
その日私は學校の往きと還りとに停車場前の通りを横切

フランネル
Flannel

つて、眞綿帽子やフランネルの布で頭を包んだ男だの、手拭
を冠つて両手を袖に隠した女だの、行き過ぎるのに遇つ
た。往來の人々はいづれも鼻汁を吸つたり、眼縁を紅くし
たり、或は涙を流したりして、顔色は白つぽく、頬耳鼻の先だ
けは赤くなつて、身を縮め頭をかゞめて、寒さうに歩いてゐ
た。風を背にした人は飛ぶやうで、風に向つて行く人は力
を出して物を押すやうに見えた。

土も岩も人の皮膚の色も私の眼には灰色に見えた。日光
そのものが黄ばんだ灰色だ。その日の木枯が野山を吹き
まくる光景は凄まじく烈しく又勇ましくもあつた。樹木
といふ樹木の枝は撓み、幹も動搖し、柳竹の類は草のやうに

靡いた。柿の實で梢に残つたのは吹き落された。梅・李・櫻・
檉・銀杏などの霜葉は、その一日で悉く落ちた。そして、そこ
に集つた落葉が風に吹かれては舞ひ揚つた。急に山々の
景色は寂しく、明るくなつた。(千曲川のスケッチ)

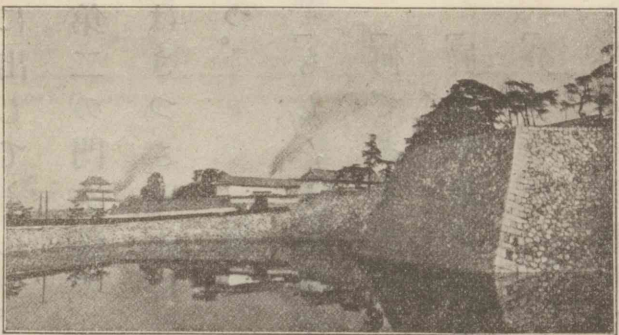
澁川玄耳

名は柳次郎
著述家
大正十五年歿す

一九 大阪城

日本第一の出世をした、日本第一の寛濶な殿下様が築かれ
た日本第一の堅城は此處大阪城。それが日本第一に早く
亡びた幕府なのだから妙だ。梅の桃の牡丹の藤の百日紅
の木槿の山茶花の花のいろ／＼にくらべて、豊臣家は櫻の
様だ。ぱつと咲誇つてけろりと一夜の嵐に散り果てた。

澁川玄耳



大 阪 城

源平・北條・足利・新田・織田・徳川は、本家なり分家なり、それ／＼
ゆかりが残つてゐて、公侯伯子男爵の
華族として、今の世にも血統を留めて
ゐるけれども、豊臣家ばかりは、榮も辱
も軍書の外に何ひとつ残らない、それ
はさつぱりとしたものだ。
第四師團の正門に差掛る爪先上り、番
兵が立つてゐる。誰何する。名刺を
出す。某部の某將校に面會と斷る。
門を潜つて右手に番兵の頭が居る處
に行けと教へられる。其處で又名刺を出して用向を申し

述べる。番頭ばんがしが帳面を繰展げて、何か認めて、兵を一人案内に出してくれた。

第二の門を潜る。電光形に幾度も曲つて行く。案内の兵はさつさと先に立つて行く。短い劍がべたくと腰を打つ。

「もしく」と呼べば、兵は立ち停る、
「何でありますか」と切口上が、當世の武者言葉と見える。

「真田幸村の固めた處は何處でございませう。」
「分りません。」

「向ふの石垣に穴が有るのは何でございます。」
「あれは銃眼であります。銃を託して射撃する處であり

真田幸村
大阪陣のときの
豊臣方の謀臣

コトヒ

ます。

「さやうでありますか。」彼處から撃てば、何處までとゞき
ますか。

「小銃でも二千米は有効なる射撃が出来ます。速射砲で
ありますと、八千米は確實なる照準が出来ます。」

第三の門を潜れば、廣場が有つて、大きな役所がある。兵は
わしらを玄關外に待たせて、一人中に這入つて了つた。

見廻せば樹木もある、芝生もある。度々の戦争に焼けたの
か、大木といふ程のものは無い。石は評判通りに大きい。
一つで五間も十間もあらう。仰山なものだ。此の石一つ
運ぶに、とても千人や千五百人の力では運べるもので無い。

よし何千人掛つても一日に五町とは動くまいに、此の大きな城を築き上げる夥しい石をよくも寄せ集めたもの、殿下の威光といふは偉いものだ。若しも、わしらの村で此の石一箇を百里も遠方から運ばせられたならば、三百戸足らずの瘠村では、男總出で以て二三代はかゝるに違ひない。想へば恐しいことだ。(日本見物)

二〇 泉岳寺

上野介の首は獲たり。四十七士の志は遂げたり。吉良邸の裏門にて銅鑼を鳴らして人員を點するに、一人も缺くるものなし。上野介の首を擁し、隊伍を整へて、回向院に至り、

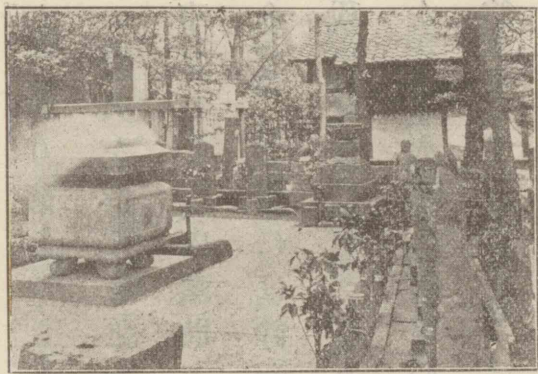
大町桂月
名は芳衛
國文學者
大正十四年歿す
上野介
吉良上野介義央

内藏助
大石良雄
大石主税
良雄の長子

伊達屋敷
芝區芝口にあつた

休息せんとせしに、住持拒んで入れず。直ちに泉岳寺さして繰出す。飽くまでも落着きたる態度なり。かばかり落ちつきても、なほ一つ手ぬかりありき。吉良邸の燈火を消すことを忘れたることなり。火事起りては大事なりとて、内藏助これを大高源吾・富森助・右衛門の兩人に命ず。これには餘程の膽勇を要す。而して、これは大石主税の發言にかゝれりとも傳へらる。かくて、火事の起る心配は無し。追兵の心配はあれども、悠悠として迫らざるは、さすがに義烈無雙の四十七士なり。されど、追兵は來らず。伊達屋敷の前を過ぐ。吏遮りて狀を問ふ、答ふるに實を以てす。吏留めず。無事に泉岳寺に

内匠頭
播州赤穂城主淺
野長矩



泉 岳 寺 四 十 七 士 墓

至り、上野介の首を井の水に洗ひ、三方に載せて内匠頭の墓前に供へし時の心中や如何なりけん。その井は首洗井と稱して、今もなほ墓地の入口にあり。いと淺き井なり。内匠頭の墓の前に一同香を供へ、各自ら名乗りて拜謁す。終りて、内蔵助進んで短刀を墓上に置き、その刃を外に向く。かくて祭文を讀上ぐ。

「元祿十五年午十二月十五日、唯今面々名乗り申す通り、大石内蔵助始め、御足輕寺坂吉右衛門迄都合四十七人、死を盟ひし臣等謹んで亡君の尊靈に告げ奉り候。去年三月十四日、尊君上野介殿を御刃傷遊ばされし御事、私共その仔細存じ奉らず。然る所、尊君御生害、上野介殿御存命、御公裁の上私どもかくの如きの企、尊君の御心にあらず、却て御怒恐入り奉り候へども、私ども尊君の祿を食み、俱に天を戴かざるの義もだし難く、共に地を踏まざるの分捨て難し。而して、晝夜艱難仕候。恥を抱き相果て候ひては、泉下に於て申上ぐべき詞これなく候。よつて、御意趣を繼ぎ奉るべくと存候より、今日を相待つこと一日三秋の思に御座候。四十七人の者ども、雨に臥し雪にたゞずみ、一日二日に漸く一食仕候。老衰の者、病身の輩は討入

尊靈に告げ奉り候。去年三月十四日、尊君上野介殿を御刃傷遊ばされし御事、私共その仔細存じ奉らず。然る所、尊君御生害、上野介殿御存命、御公裁の上私どもかくの如きの企、尊君の御心にあらず、却て御怒恐入り奉り候へども、私ども尊君の祿を食み、俱に天を戴かざるの義もだし難く、共に地を踏まざるの分捨て難し。而して、晝夜艱難仕候。恥を抱き相果て候ひては、泉下に於て申上ぐべき詞これなく候。よつて、御意趣を繼ぎ奉るべくと存候より、今日を相待つこと一日三秋の思に御座候。四十七人の者ども、雨に臥し雪にたゞずみ、一日二日に漸く一食仕候。老衰の者、病身の輩は討入

をあせり候へども、蟻螂の斧を頼むの笑を相招き、愈以て尊君の御恥辱を相残し申すべきかと控へ居候ひしかど、止むことを得ず、昨夜申合せ、上野介殿御宅へ推参仕り、即ち上野介殿御供申し、これまで参上仕候。この脇差は尊君先年御祕藏、我等へ下し置かれ候。只今返獻仕候。御墓の下、御尊靈これあるに於ては、再び御手を下されて御鬱憤をはらし給へ。右の趣四十七人一同申上候。

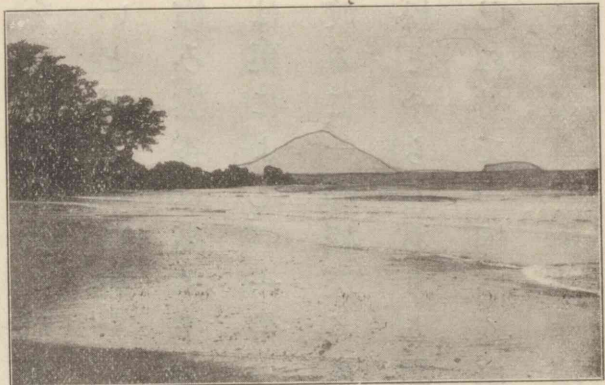
義士一同みな涙を流す。一篇の結末ことに哀痛なり。千載の下、なほ讀者をして泣かしむ。(四十七)

二一 三浦路

川上眉山

川上眉山
名は亮
文學者
明治四十一年歿
四月
宿
神奈川縣三浦郡
逗子町の旅宿

四日早起、昨夜起草したる稿を繼ぐこと少時、別に私書二通を認めて日高く宿を出づ。村松風は靜かに面を吹きて浪いと優しげに磯を打つ。空は晴れたり。見渡す島山は打霞み、雲雀は高く上に鳴き連れて、さながら春の心地す。道は更によし。一帶の沿岸、風色すべて佳なり。森戸の川を渡るに、一岬、松深く風情優しき所、こゝに明神の祠あり、千貫松とやらんありと聞きしかど今は見えず。岩礁漸く繁し。已にして一岬高く出でたる長者ヶ崎の上に出づ。風景更に佳なり。由井ヶ濱、稻村ヶ崎、七里ヶ濱の波は玉を展べて、江の島山は盆石を浮べたり。長井の荒崎は南に長く、天神



ケ崎は近く、三浦の岬は遠く、蒼々幾十里、大島の煙はほのかに空を掠めて、伊豆の山脈は蜿蜒としてはるかに雲煙の間に出没す。我が富士なるかな。いづく如何なる時にも秀いよ／＼秀に、従容迫らず、麗しけれど侮られず、靜かに扶桑の美を收めて高く雲表に傑出す。折しも薄靄かすかに裾を罩めて、空の匂いと深し。我が富士なるかなと、獨り斷崖の上に立ちて暫し去ること能はざりき。大崩おほくづれの下を過ぎ、浪打際を縫うて處定めず行く。十歩一景

を生ず。風光到る處によし。已にして暫く田畦の間に入る。僧侶三四年賀の配物持たせて各戸を廻るに逢ふ。前を行く野夫に語らひ寄りて道を共にするに、いとをかし。苦打つ竹を擔げて行くもの、魚籠肩に急ぎ來るもの、まだ正月を遊びありくもの、背負梯子うしろに焚木負ひて熊手のせて歸るもの。處を問へば、此處を蘆名とかや。連の男我が爲に遠廻りして、導きて又渚に出づ。鹿島といふは、こゝらあたりなるべし。白砂前に走り、青松後を繞りていと麗らかなる入江なり。海風ぎて鏡の如し。見渡す方はみな打煙りぬ。投網を手にしたる男三人海中に立ちて、鰯の寄り來るを窺ふ。一群の子女、紅紫を交へて

渚に立てり。眞砂を踏んで屈曲したる濱邊をなほ行くこと少時、僅かなる鹽田を見る。鹽焼く煙もあらばと思へど、まだ閉ぢたればなし。空は霞み渡りて、浪いよく優なり。のどかに打語らうて徐歩して長井の村に入る。連の男の酒を好むといふに、飲ませんと思ふ興深く、強ひて酒亭に案内せさす。土藏づくりの中二階に通され、窓を開くに、海そこもとに近し。丸裸なる漁家の兒群三十人ばかり、手に手に注連繩を持ちて地を打叩き、出さいな、出さいな、出ないものはがにぐぞう。とのゝしり合ひつゝ相追うて走る。

(眉山美文集)

二二 豪商と碩儒

東京日本橋通に一際目に立つ大きな呉服店がある。白木屋といふ。その目の覺めるやうな店頭の裝飾は市中の花と呼ばれるくらゐ。遠近の顧客引きも切らず、店は日増しに繁昌してゐる。

さて、此の店を開いたのは大村彦太郎といふ京都生れの人だが、彦太郎が故郷を去つて江戸に来て、呉服商となつたまでの話は、實に立志成功の美談である。殊に、彼と共に志を立て、成功を競うたのが、一代の名儒三輪執齋だといふは、愈、以て珍しい話である。

執齋は京都の醫者の子。六歳の時父に別れて、母方の一族

十八の春
貞享三年(三四六)
の春

大村某といふ商人の許に引取られた。この商人は即ち彦太郎の親父である。それで、兩人は兄弟同様に育てられてゐたが、執齋十八の春の事、一日彦太郎に向つて、何時までも人の厄介になつて居るも不本意なれば、一つ江戸に出て、思ふ存分やつて見たいもの。」と志のほどを明した。彦太郎もかね／＼同じ考を持つてゐたので、それでは一緒に出かけよう。」と相談忽ち一決して、さて執齋は醫者か儒者、彦太郎は商人と、めい／＼志を立て、互に手を携へて江戸へ下つた。東海道五十三次も大方通り越して、品川に着いた時、執齋は彦太郎に向つて、さて、今までは互に助け合つて苦樂を共にして來たが、いよ／＼江戸へ入る以上は、めい／＼離れ／＼

になつて、精一杯働かねばならぬ。お互に大願成就は十年先の事か、二十年先の事か、わからぬ。それまでは落着く處さへ定まらぬこと故、居處を知らせ合ふことも出來ない。



大村彦太郎

まして往來することは迎も出來まい。ともかくも、こゝで別れて五年後の今月今日の夜、日本橋の上で面會することにしよう。」と語り出した。彦太郎も

快く同意して、互に袂を別つた。時は貞享三年三月三日の事であつた。

僅か四年の歲月、徒に過さば夢とも過ぎよう。此の間に相

佐藤直方
剛齋と號す
江戸屈指の儒者
享保四年(三三九)
歿す
山崎闇齋
京都の大儒
天和二年(三四二)
歿す
五年目
元祿三年(三三〇)

互に負けず劣らず初一念を貫かうと誓つた二人の心は、さても殊勝なもの。かくて、執齋は、自分こそ一代の名醫とならう。大儒とならう。彦太郎は「己れこそ一世の豪商と呼ばれてみせよう」と互に精限り根限り勉め勵んだ。執齋はその翌年佐藤直方の門に入り、儒學を研究することゝなつた。この直方は山崎闇齋の高弟で、當時の大儒であつたが、深く執齋の志に感じて、懇切に引立てた。そのお蔭で、執齋は學問も速かに進歩し、三年許りの間に先生の代稽古をするまでにになり、上州前橋の酒井侯より客分として十人扶持を賜はることゝなつた。やがて、五年目の三月三日となつた。執齋は夕方中間を一

三年目
元祿五年(三三二)



三 輪 執 齋

人召連れて日本橋に行つて、彦太郎遅しと待ちうけてゐた。間もなく、彦太郎もまた番頭を一人連れて來た。五年前笠一つ杖一つで京都を飛び出したこの兩人が、五年後の今日、各一僕を従へるだけの身分となつて、昔の約束のまゝに、日本橋の上に來て、互に心中を打明けた、その愉快さはどんなであつたらう。併し、兩人とも今は漸く成功の端緒に就いたばかりだと云ふので、互に居處を明さず、職業も告げず、更に三年後の再會を約して、またも袂を別つた。さて、三年目の三月三日となつた。

その夜半、二人は約の如く、再び日本橋の上に相會した。執齋は若黨二人、中間二人に箱提灯を點けさせ、身のまはりいかめしく、堂々とおし出した。彦太郎もまた若者二人に小僧二人を従へ、いかにも豪商らしい扮装でやつて來た。この時、執齋ははや一かどの學者となり、前橋侯より三十人扶持を賜はり、他の大名にも澤山の門人ができて、其の名は儒者の間に高くなつて居た。そこで執齋は、年頃の志望、先づ先づ成就した。今はお互に居處を明し合はう。といふに、彦太郎も打領き、いかにも。自分は最初通一丁目に微かな小切店を開き、主僕兼帶の一人で働いて居たが、段々と身代を仕上げ、今では五十四人の男女を召使ひ、人にも知られた吳

通一丁目
江戸日本橋通一丁目

服商となつて、屋號を白木屋と呼んでゐる。と答へた。かくて、兩人は改めて兄弟の契を結び、彦太郎の方二歳上なればとて、兄と定めた。白木屋の祖先は即ちこの彦太郎で、爾來子孫相繼ぎ、二百餘年の今日まで、家運益榮えて居る。

(實業補習讀本)

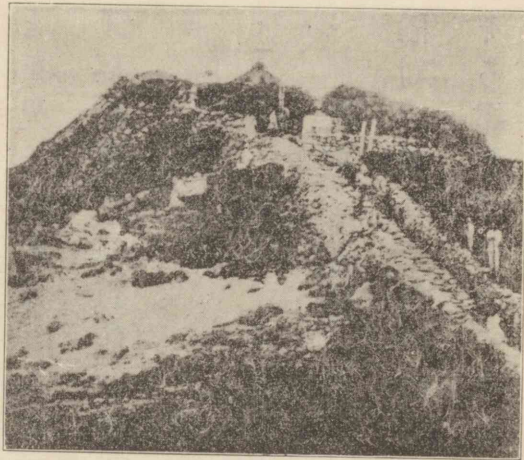
二三 北地の冬

五十風力

稻刈が濟んで、背戸の熟柿が紅に染まるころになると、そろそろ霜柱が立つ。そして、道を歩くと、下駄に土がくつ附いて重くなる。西の月山湯殿山が白くなる。肌を裂く様な寒い木枯が吹荒む。かくして、我が郷に冬が來るのである。

五十風力
文學博士
國文學者
早稻田大學文學部長
月山
湯殿山
共に山形縣に在る

十二月になれば、全く雪に閉込められてしまつて、家々では、陰鬱な冬籠りの生活に入る。四方山の話や人の噂が炬燵を圍んだ人々の口に上る。吹雪の時などは、少しの戸の隙から、月も細かい砂の様な雪が吹込むので、雨戸をしめきつて、一日、薄暗い山生活をする。それでも、晴れた日には南の縁に、婆さんの針仕事も見受けられる。子供等は小さな赤い手をして、棒の様な氷柱を持つたり、雪達磨を作つたりして遊んで居る。雪解の雨垂がぼたんぼたんと、静かな冬



の日にさえ渡つて聞える。一月の末になると、五六尺も積つた雪が踏んでももぐらぬ位に堅くなる。やがて、壯快な兎狩が始る。子供の氷滑も盛になる。小山に登つてみると、山となく、野となく、見渡す限り只眞白な中に、長く紺青の一筋道を描いて、最上川がうねつて居る。



北地の雪積

三月の末には、雪が段々融け、最上川の水量が増して、漸く暖

かい、楽しい春になる。梅桃櫻李皆一時に咲揃ふのである。まるで冬の世界とは違つたやうな心持がする。自然から、雪と云ふ大壓迫を受けて居た人々が、冬の陰鬱な生活を送り出して、花咲く春に逢つた時の愉快は、實に言葉に盡されぬ。
(實習新作文)

薄田泣菫

名は淳介

大阪毎日新聞記

者

梅一輪

服部嵐雪の句

二四 梅の花と露の臺

薄田泣菫

梅は、もう咲き出しさうな時候になりました。櫻の花のおもしろみは、一夜の暖かさに、朝まだき思ひもか
けず、しら／＼と雲のやうに咲き揃うてゐるところにあり

ます。それに比べると、梅の花の趣は、堅い幹に當つた早春の生暖かい日の光が、樹の髓にしみとほり、枝から梢に傳はつて、やがてぼつり／＼と一輪づつふくらんで來るところにあるやうです。

いつだつたか、京都の下鴨で、つめたいがさ／＼に干割れた樹肌をした梅の老木が、たつた一本南の方に突きだした小枝にはづかしいほど眞赤な花を二三輪着けてゐるのをみて、こんな「死」そのものゝやうな古ぼけたものゝ中にも、暖かい春の生命は感じられるのかと、今更のやうに驚いたことがあります。

私の故郷の家には、後の畑にたくさんの梅の樹が植ゑてあ

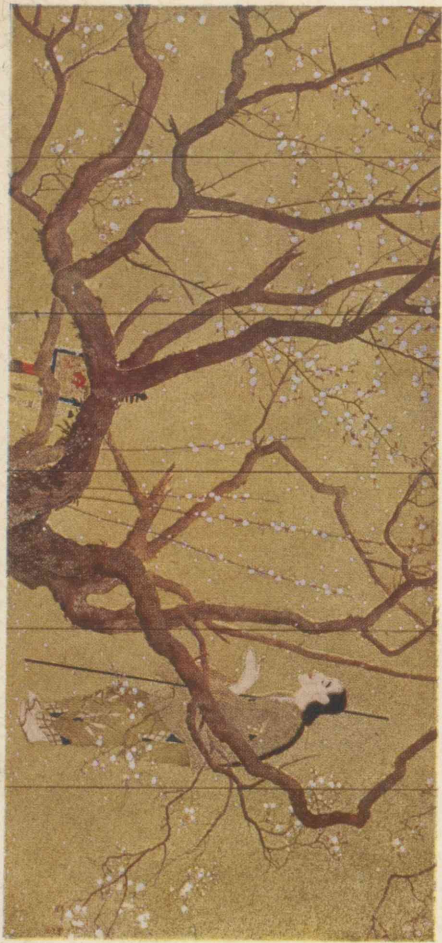
私の故郷
岡山縣淺口郡連島町

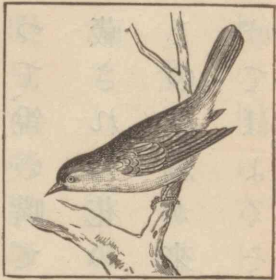
ります。梅の樹には、敷へき終ない程たくさん種類があります。梅の屋敷のは、緑萼といつて、花のうてなに普通の梅に見るやうな、少しの紅みをも帯びないで、青みの勝つた、花瓣もどちらかと言へば、幾分青みのさした樹であります。樹の風情からいふと、すなほすぎる嫌ひがないでもないが、花の美しさと香の高さは、一寸似るものも少いやうです。ほのかな夕月の影で見ると、よくとりわけ四隣の寝しづまつた月の夜更けに見るのがよろしい。白々と霧のやうな淡さが畑一面に漂つて、大地の底から、又空の高みから、するやうな深い溜息の香氣が、冷えくと魂の中までしみとほるやうに覺えるのも、この花だからでせう。



師法録

華山觀村下





鶯

花が咲きそろふころになると、鶯も来れば
繡眼めいげん兒こも来ます。繡眼兒は連を誘つて多
勢であわただしく飛んで来ますが、鶯は大
抵ひとりぼちです。こなひだ誰だかの

書いたものを見ると、その人は昔からよく「梅に鶯」といふが、
外の木も澤山あるなかに、鶯はなんだつて梅の樹を好いて
来るのだらうと、色々詮索の結果、やつと鶯は梅の花の薬を
食みに来るのだとわかつたといふことを
言つてゐました。それに間違はないとし
て、私の見たところによると、鶯は梅の花の
薬を吸ふよりも、どちらかといへばざらざ



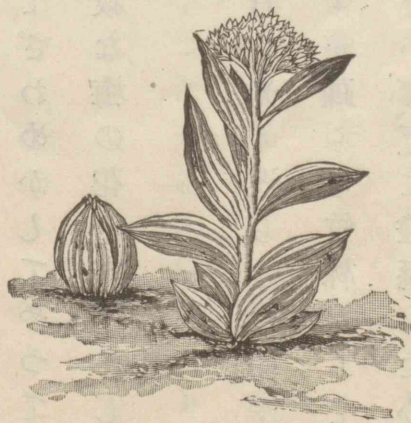
るじめ

らした梅の樹肌に棲んで、そこで冬籠りをするいろんな昆虫の方を好いて食べてゐるらしい事です。小鳥を飼ふ人が幼い鶯の兒の餌づけに、よく小さな蜘蛛を使ふのを見てもそれはわかる筈です。梅の花の葉を好くのは、鶯よりはむしろ繡眼兒の方で、樹から樹へ鳴きかはして多勢で飛んで來るこの小鳥は、花の枝にぶら下つたり、とんぼがへりを打つたりしながら、さもうまくてたまらなさうに舌鼓を打つて、鋭い嘴で花瓣をおし分け、おし分け、葉のふくらみに密藏された花の蜜を吸ひとつてゐます。私たちは子供の時、この小鳥が來ると、花がとまらないからといつて、小石を投げてはよくそれを追はされたものでした。これを思ふと

梅の樹になにか小鳥をあしらはなければならぬとする、鶯よりは繡眼兒の方がふさはしいやうです。たゞ困つたことは、鶯が詩人のやうにひとりぼちなのに比べて、繡眼兒は労働者の群のやうに、多勢でざわめかしてやつて來ることです。あの騒がしさが閑寂な梅の花の友達としては好ましくありません。梅には竹藪がよくうつります。月の光も洩らさないやうな、たけの長い大竹藪はこまりますが、疎らな竹林ならどちらもの感じや、氣持やを傷め合はないで、互に謙遜した心で早春の日ざしのなかに、隣りあはせに住みあふことが出來ると思はれます。柿の木と竹藪とは仲好して、柿は秋にな

るとその落葉で土を肥してくれまますので、竹は根を張るにも柿の木をよけると言ひ傳へられたものですが、私は竹の隣りあはせとしては、柿よりもむしろ梅を好ましく思ひます。

梅はたつた一本野中に立つてゐるのもよいが、また互に他のまねをしないで、思ひくゝの性格を維持し發揮しあつて、林を形づくつてゐるのも面白いと思ひます。實際梅はその枝ぶりにもまた花ぶりにも、どこか性格の樹だといふ氣持が味はれます。その下に綺麗な小流れがあるとなほよいが、流れはな



露の臺

くて、一寸した畑地があるのも悪くはありません。畑には是非露の臺がほつかりと芽を出してゐてほしいと思ひます。高い梅の香をそことしもない空の思と見るとき、露の臺の舌をしびれさせるやうな苦い味はひを、土の心とかみしめてみるのも、捨てがたいものゝ一つであります。

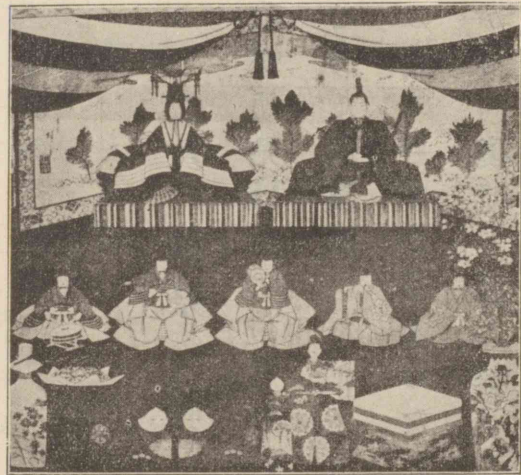
(太陽は草の香がする)

二五 春の雲

三 木 露 風

春が來たのに、
この雪、みぞれ、
寒い、さあむい、

三木露風
名は操
詩人



りの壇をしつらひて、例の内裏雛と五人囃子とを並べ祭るに、寂しげながらも目美しく、我はゆくりなくも、我が亡き親のこと慕はしく、しのばしくなりぬ。

雛膳碗などの箱と共に棚の上に並べられたる一つの箱には、鼻の缺けたる紙雛、手足の無きはふこ様、去年のお煎りの紙に包まれたる、小さき簞笥の壊れたるを觀世捻にて括りたるなど、我はこれを雛様箱と呼びて、三月の節供が來れば、其の箱を直ちに臺として其の上に祭

子規子
正岡子規

りて樂しみしが、隣の家の美しきを見て歸りては、あまりに寂しく汚きに慊らず、母上に訴ふれば、男の子のするものにあらず」と叱られて、我に女の兄弟無きことの情なく、果ては我の女にあらぬことをさへ情なく覺えて、厚紙に金紙貼りつけ、之を雛の屏風なりとして、僅かに自ら慰めたる事など、今の如く思ひ出でぬ。

かゝる所に、子規子の妹君より裸人形を幼き者にと送りこされたれば、五人囃子ばかりの寂しげなりしものも俄かに引立ちて見え、それを内裏雛の何れの側に置くべきかなど、三十近き男の詮議するもをかし。其の日の暮、簞笥長持兩掛より鏡臺茶簞笥金盃雪洞など、何れも美しく、新に壇を飾る

ことゝなりたり。桃の花も生けられたり。菱餅もお煎りも白酒も供へられたり。やがて、小さき雪洞に灯ともすに、雛の顔さへ光を増して、桃の花も俄かに咲き競ふかと覚え、五人囃子の鼓の音も今か響き出づらんと、たのし。幼き者の喜、母なる人の喜、さては髯男の我が喜、春色俄かに三尺の廬に充ち満ちたるが如し。

唯手足の無き古びたるはふこ様を此處に並べ見ぬことの物足らぬやうに覺ゆるは、如何なる故にかあるらん。

さるさとの雛戀しき都かな。(寒玉集)

二七 貨幣礫

三浦修吾

貨幣礫

これはイタリヤのアミーチス (Edmond De Amicis) の原作を譯したものである

三浦修吾 教育家 評論家 大正九年歿す

バルセロナ 西班牙の東海岸北部の港
Barcelona 地中海に臨み佛國の西境に近い處
ゼノア 伊太利の西海岸の北寄りの港
Genoa 地中海に臨み佛國の東境に近い處

西班牙のバルセロナから伊太利のゼノアに向けて出帆した一艘の汽船があつた。船中には佛蘭西人、伊太利人、西班牙人、瑞西人などが乗つて居た。その中に十一歳になる一人の少年が居た。みすばらしい身なりをして、野獸の様に獨り人を離れて、打沈んだ眼附で人をじろく、見て居た。彼がこんな眼附をするのも無理の無い事だ。今から二年以前に、伊太利の田舎に百姓をして居る彼の兩親が、彼を輕業師の一行に賣渡した。その一行は、彼を撲つやら、蹴るやら、ひもじい目にあはすやらして藝を教へ込み、佛蘭西や西班牙あたりを引張り廻し、始終打擲して食物も十分に與へてなかつた。一行がバルセロナに着いた時、彼は虐待と飢

饑とに堪へ切れないで、たうとう遁げ出してしまひ、伊太利の領事館に行つて保護を求めた。領事は深く同情して、彼をこの汽船に乗せてやり、ゼノアの出納官に宛てた紹介状を渡してくれたのである。そこから、無慈悲な兩親の許へ送り歸して貰ふ都合なのだ。少年はあそこゝに傷を受けて居て、非常に衰弱して居た。二等室に乗つて居るので、人々が不思議に思つて、彼を眺めて居た。人が物を言つても返事もしない。すべての人間を惡み厭ふ様に見えた。かくまでに彼の心はひがんで居たのであつた。三人の乗客が色々と問ひ試みて、やうやく彼の口を開かせた。彼は伊太利語に佛蘭西語と西班牙語との交つた無器

用な言葉で、概略その身の上を物語つた。この三人は伊太利人では無かつたが、彼の言ふことが分つたので、半分は同情からと又半分は酒に酔つて居たからとて、金を少しばかりくれて、猶話をつゞけさせた。その時大勢の婦人たちがその室に入つて来て、少年の話を聞いて、彼等は人に見えるやうにして、いくらか金を出して、「これをやらう。」これもお取り。と言つて、食卓の上になら／＼と投出した。

少年は低い聲で禮を言つて、金をみなポケットに入れた。苦り切つた顔の上に始めて嬉しさうな笑みを見せた。それから彼は自分の寢所にはひつて、幕を引いて靜かに横たはつて考に耽つた。此の金があれば、船中でおいしい物を

買つて、二年間も飢ゑて居た腹をこやす事も出来るし、ゼノアに着いたら、上着を買つて、襪褌を脱ぎ棄てる事も出来る、又金を持つて家に歸れば、無一文で歸つたよりは、父母から少しは人間らしい待遇を受けることも出来るのだ。此の金は彼に取つては一かどの財産であるのだ。彼は寢所の中でこんな事を考へて快い思に耽つて居た。

その時まだ、かの三人の旅客は二等室の食卓を取巻いてしやべつて居た。彼等は酒を飲みながら、旅行中に見た國々の話をして居るのである。

話は遂に伊太利の事に及んで、一人は伊太利の宿屋に對して不足をいふ、一人は汽車を攻撃する、だんく、醉がまはる

に連れて、彼等は何もかも悪しざまに言ひ募るやうになつた。伊太利に行くよりか北極にでも行つた方がよいといふ。伊太利には騙詐者や追剥が居るばかりだといふ。しまひには、伊太利の役人は字も知らないと言つて罵る。「無智な國民だ。」「下等の國だ。」「ぬす……」

一人が、今や盜賊カサドと言はうとして言ひも終らない中に、銀貨、銅貨の礫が、雨の様に彼等の頭の上や肩の上に落ちて來た。そして恐しい音をして、食卓の上に飛んだり、床を轉つたりした。三人の旅客も憤然として起き上ると、又一つかみの銅貨が彼等の顔に打ちつけられた。

「持つてうせる。」少年は寢所の幕の間から顔を突き出して

どなつた。「おれの國の悪口いふ奴等からは、何貰ふかい。」

(愛の學校)

二八 笛

坪内逍遙

第一幕

坪内逍遙
名は雄藏
文學博士
劇研究者
英文學者

前に大きな池があつて、そのうしろに森があつて、池の岸の近くに
辨天さまの社がある。

銀吉、十歳ぐらゐの村の子、粗末な縞物を着て、手に横笛を持つて出
て来る。或上手な神樂師の息子で、持つてゐる笛は父親が平素か
ら使ひならしてゐる樂器なのである。

銀吉 おとうさんは上手だなあ。 どうしたらあゝいふ風に
吹けるか知ら。 どうかしてあゝいふ風に吹きたいなあ。

といろくと吹きかけて見るが、いゝ音色が出ない。村の男の子

や女の子が大勢出て来る。

新一 御覽、あそこに銀ちゃんがるよ。 君たちはあの子を
知つてるかい。

松子 えゝ、あの子のおとうさんは笛を吹く事が上手でせう。

新一 さうさ、あの子のおとうさんはお神樂師だもの。

新一 銀ちゃん、君もお神樂師になるのかい。 一つ吹いて聞
かしてくれたまへ。

銀吉 わたしにや吹けないよ。 まだ習はないんだもの。

新一 習はなくなつて、少しぐらゐは吹けさうなもんだねえ。
僕にだつて少しぐらゐは吹けるよ。 君は笛吹の子ぢや
ないか。

松子 吹いて聞かして頂戴なよう、銀ちゃん。

新一君、よく君のおとうさんが吹くね。そら、トッピキピー

のピッてのがあるだらう。あれを吹いて見たまへよ。

よう。

銀吉 ぢや、やつて見ようか。吹けるかも知れんよ。

銀吉 吹く。けれどもちつともいゝ音色が出ない。變な音ばかり

出る。

ブーッ！ ジューッ！ ブーッ！ ジューッ！ ジューッ！ ジューッ！

！ ジューッ！

みんながころげ廻つて笑ふ。

皆々 あはゝゝゝ。あはゝゝゝ。だめだ〜。 笛吹の

子の癖に、駄目だなあ。下手だなあ。あはゝゝゝ。あは

はゝゝ。

新一人を馬鹿にしてゐる。ねえ、胴上げしてほうり出して

やらう。

新一が先きに立つて、銀吉を胴上げにする。女の子らはとめよう

とするが、それを追ひのけて三四人で銀吉をあつちこつち持廻つ

て投げ出し

男の子等 わあい〜！ わあい〜！

と囃し立てゝいつてしまふ。女の子らも一しよに入る。銀吉は

聲をあげて、口惜しがつて泣く。

銀吉 あゝ、くやしい〜。なぜわたしには笛が吹けないの

だらう。おとうさんのやうに、笛を吹けば、だれでも〜

みんな浮かれて、踊り出すやうな上手な笛吹になりたい。
あゝ、くやしい。くやしい。

と泣く。

社の扉が内から開いて、辨天さまが出て来る。

辨天 (銀吉のそばへ来て) 銀吉や、お泣きてない。え、どうしたの。
なぜ泣くの。

銀吉 笛が吹けないもんだから、みんながわたしを馬鹿にし
て、ひどい目に逢はしたあゝ。わあゝ。わあゝ。

と大きな聲で泣く。

辨天 泣かなくてもいゝよ。わたしが手傳つて、吹くことを
教へてあげるから。お前は上手な笛吹になりたいのか
い。

銀吉 おとうさんのやうに、だれでもみんな浮かれて踊り出
すやうに吹きたいんです。

辨天 何でも、わたしのいひつける通りにしますか。

銀吉 えゝ、何でもします。

辨天 きつとだね。ぢや、わたしについておいで、吹くことを
教へてあげますから。さうして、おぼえたら、明日から、ひ
まさへあればおさらひをなさい。さうしてこれから一
年の間は、一日だつてなまけちやいけないよ。さうすれ
ば、きつとおとうさんの通りな上手になります。さうし
てだれでもお前の笛を聞けば浮かれて面白がつて踊り
ます。さ、ついで。

辨天さまは森の方へ進む。銀吉はその後についてゆく。

第二幕

場所はおなじところ。時は一年たつた後のつもり。銀吉が又笛を持つて出て来る。

銀吉 辨天さまにをそはつてから、もうちやうど一年になつた。わたしは何もかも辨天さまの御命令の通りにした。あれから一日だつて休みやしなかつた。自分ぢや分らないが、上手になつたか知ら。上手になりや、それを聞く者は、だれでも浮かれて、面白がつて踊り出す筈なんだから、誰れか來さうだつたら、吹いて見ようや……(一方を見て) お、およた婆さんが来る。吹いてやらう。けれどもあ

の足つきぢや踊りさうにないなあ。

と歌口をしめして吹く準備をする。

村のおよた婆さんが海老のやうに腰を曲げて雞卵の籠を持つて、びつこを引くやうにして、よたくと出て来る。

よた やれく。 やれく。 やれく。 やれく。 あゝあ
あ、どうもく。 リョウマチスが、いたくて、いたくて。

と立ちどまつて、溜息をして。

あゝ、もう一足もあるかれやしな。

銀吉が笛を面白く吹きはじめ。

よた (聞きほれて) ま、なんといふいゝ音色だらう。 陽氣だこと。
面白いこと。 おやくく。 おやく、おや。(とだんく
浮かれ出して) こりやもう、じつとしちやゐられないよ。

Rheumatism

リョウマチス

ひよこすか〜と歩きはじめて、いつの間にかやらぶきつちような風をしつゝ踊り出す。だん〜身輕に愉快さうに踊り廻る。しまひには雞卵の籠を抛り出してしまつて踊る。銀吉が笛を吹きやめると、婆さんもすぐに踊をやめる。さうして苦しさうにはあはあといつて喘ぐ。

こゝへ氣むづかしさうな、こはい顔をした爺さんが、馬に荷を背負はして、牽いて出て来る。

爺 しつ。 しつ。 やい、どうした。 さ、いけ〜。 なぜある

かないのだ。

と手に持つてゐる竹で馬の尻をぶつ。

馬 ひゝゝゝん。 ひゝゝゝん。

爺 しつ。 しつ。 さ、さ。

銀吉が又吹きはじめる。

爺さんは通り過ぎたが、立ちどまつて

爺 おや。 ありや何だ、笛だな。 陽氣な、面白い笛だ。 おやおや〜。 こりや不思議だ。 自然に此の足があがつて、此の手がこんなになつて。 おや〜。 おや〜。

銀吉は盛に吹く。 爺さん初めのうちは、しちむづかしい、こはい顔をして、いや〜踊るといふ風に踊つてゐたが、笛が調子づくにつれて、だん〜浮れ出し、持つてゐた竹の鞭も、馬の綱も手から放してしまつて、愉快さうに、嬉しさうな顔をして踊り廻る。

およた婆さんも又踊り出す。

銀吉が吹きやめると、二人も踊をやめて、同じやうにはあ〜といつて喘ぐ。 こゝへ前の幕の新一や松子や其の他村の子供がみんな出て来る。

松子 今のあのいゝ聲はどこから聞えて來たのだらうね。

わたし踊り出したくなつてよ。

銀吉が又吹きはじめる。

子供皆々 あゝ、あれだく。銀ちゃんか吹いてゐるのよ、あ

あ、いゝ音色だこと。いゝねえ。面白いねえ。

子供らもみんな踊り出す。爺さんも、およた婆さんも又踊る。馬までが踊りさうにする。荷物がころげ落ちる。馬はそれにかまはず、後足で立つて、人間と一緒になつて踊る。吹きやめると、みんなが踊をやめる。

新一 おい〜！ およた婆さん。御覽なさいよ。籠がひつくりかへつたよ。あら！ 鶏卵がみんな破れつちまつたよ。

よた たまごなんかかまはないよ。銀吉さん、お前さんのそ

の笛のおかげで、わたしのリョウマチスがなほりましたよ。

松子 あら、お爺さん、お前さんの大事な鞭ぢやなくつて、そこに落ちてゐるのは。折れつちまつてよ、馬が踏んだものだから。

爺 もう鞭なんかいらぬ。もうわしは馬をぶたうなんて氣になれない。(銀吉に)お前さんの笛を聞いたら、わしの氣がかはつてしまつた。何だか若くなつたやうだ。人でも馬でもみんなかはいくなつた。

銀吉 お爺さん、馬の荷物がおちてるよ。

爺 もう一遍をどつてから附けてやるよ、

皆々さうよ！ もう一遍、もう一遍！

銀吉が又吹きはじめる。みんな又踊りはじめる。
社の扉があいて、辨天さまが覗く。

辨天 ほんとに面白さうだ。わたしも踊つて見たくなつた
あの仲間へはひらうや、さあく、もつとお吹き、もつとお
吹き。

辨天さまも一緒になつて、踊りながら森の中へ入つてしまふ。

(兒童劇集)

新定女子國文卷二終

昭和三年二月二日
文部省檢定
高等女子學校國語科用

昭和三年二月二日
昭和三年二月二日
昭和三年二月二日
昭和三年二月二日
昭和三年二月二日

新定女子國文
【全十冊】

昭和三年 臨時定價	卷一、三、四、十	金六拾六錢
昭和三年 臨時定價	卷二	金六拾五錢
昭和三年 臨時定價	卷五、六、七	金六拾一錢
昭和三年 臨時定價	卷八、九	金六拾三錢

定價	卷一、三、四、十	金四十錢
定價	卷二	金三十九錢
定價	卷五、六、七	金三十七錢
定價	卷八、九	金三十八錢



著者 吉田 彌平

發行兼印刷者 金港堂書籍株式會社
東京市神田區美土代町三丁目一番地

代表者 原 安三郎

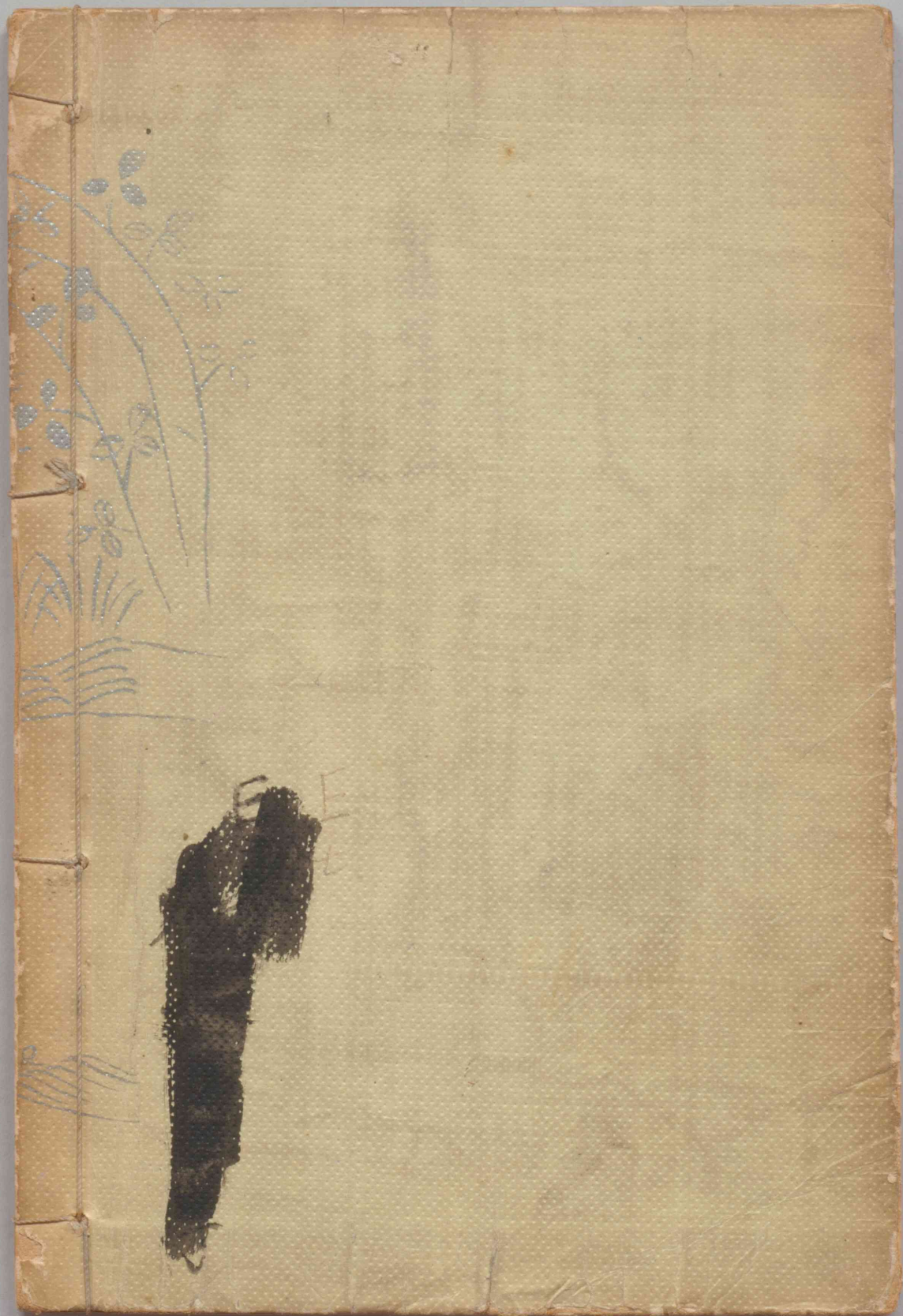
印刷所 日清印刷株式會社
東京市牛込區榎町七番地

發賣所

東京市神田區
美土代町三ノ一

振替時金口座
東京八八一五番

金港堂書籍株式會社



.GA

JAPAN
HIROSHIMA
TAKEYA

Mrs M. Yamamoto
Yamamoto
Makiko

S S Sunamoto

Sunamoto poppy

Sunamoto Sunama
y Sunamoto
yamamoto
Sunamoto

his
hoam This This is a
hoan poppy
hoan / tashiko